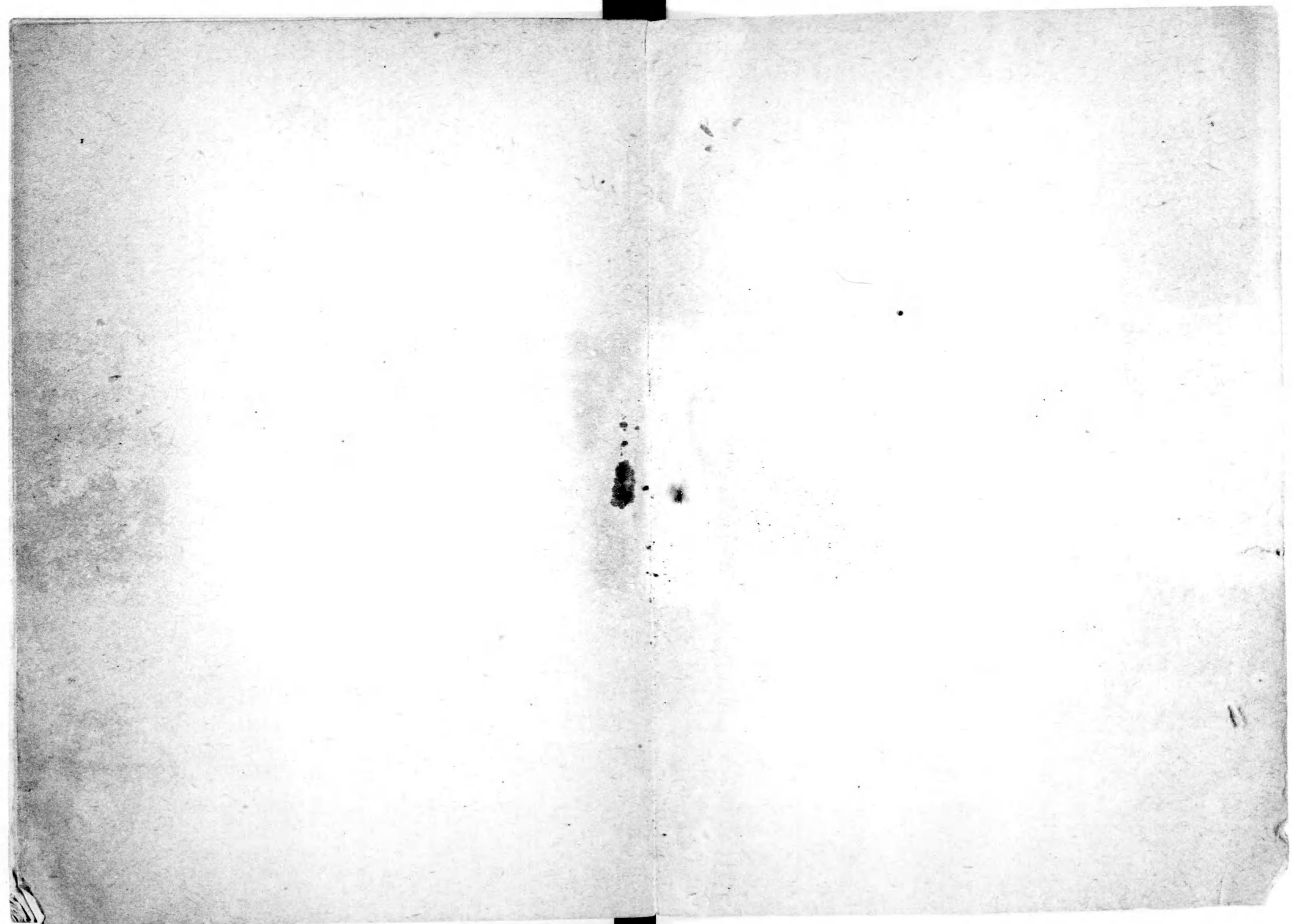


0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹/_m 1 2 3 4 5

始





特 100
215



序

易は、支那の聖人が多年の間力をこめた學術的研究の結果になる一つの道であつて、あたるも八卦、當らぬも八卦などといつて馬鹿にしてはならない

此の書は、その學術的研究を、平易に、分りやすく書き下したもので、坊間流布する身の上判断などは異ふ、本書一卷を机上において、事業を計畫し目的を立て、其他自分の身の上につけて來る百般の出來ごとを判断して、決行して行つたならば、失敗さか、不成功さか、云ふことは決して皆無である

著者しるす

大正
7. 4. 23
内交

活用新式 吾が易占

大綱目次

卜筮門

- 讀者の心得……………第一頁
- 便筮式……………第七頁
- 卦象納甲……………第十七頁
- 用神式……………第四十二頁
- (伏神)……………第四十六頁
- 體用真訣……………第五十四頁

- 六十四卦大意……………第五十九頁
- ◎運勢の占式……………第九十二頁
- 同試題……………第一百二頁
- ◎訴訟の占式……………第一百四頁
- 同試題……………第一百三頁
- ◎質問規定……………第一百十四頁

易 學 門

- 河洛一家言……………第一百十七頁

新活用 吾が易占 高島天籟 著

◎卜筮門

○讀者の心得

○易は中るものぢや、いな中らぬものぢや、此の二人の言みな當つてゐる吾輩は兩方へ軍配をあげませう。曰く易は有害ぢや、曰く有益なものぢや、然矣害も有らう又益にも立つたらう、人の評判には必ず半面の眞理は持つてゐる

◎吾が易占

るものと思はれます。吾輩の見る所では易占は中らぬを争ふ以上に在つて更に大意義が有るのでは御座るまいか、元より何も中らんでも可也と申すのでは無い、易は中るもの、中るからこそ易で有ります、が吾輩の謂ふ易の本旨に至つては中不中以上の大意義を思はずに止められない。

○易占修行を分けて三期とする、第一期は「中るばかりに氣を止める」第二期は「中らぬばかりに氣をいらつ」第三期は「中必せず不中置かず豁然として深う觀抜き泰然として大局に手を下す」難關は第二期であつて落第する者は勿論、その自分で及第したと信ずる人も實は全うしたの

で無い「多い中には中らぬのも免れないから……まあ可也」といふ自分免許で推通してゐるのも少なからぬやうに想ひます。

○もど中るべき筈のものを中て得ずして其れを誇る道理は無からう。されば吾輩は世の易占を研究せらるゝ方に對して此に第一期すなはち「中る易占法」を説いて、中てる力を同胞に與へたいと希ふ。先年「易學顧問」でも申した通り占法は何氏の式何流の形によるも自由だ、神と我との豫約である故に何式を用ゐても中ります、占ふ人の心が其れに凝集しさへすれば。

○しかし乍ら何式を用ゐても苦しく無いものと致せば、使ひ工合の良、融通が利いて、筋が立ちて、世事進歩の面に従ふ所の方程式に據るのが便且快ちや有るまいか。道は古今を通じて一、之を求め方方は必ずしも一で無い、是れ所謂改善、進歩、發明、修補などいふが出来つゝある所であります。

○それ故吾輩の易占と雖も敢て之を完全な者とは思はぬ、諸君と共に層々改修進歩せしめたいのは無論わが希望で、従つて是は唯ほんの初歩の士に道の乘として吾が一日の長を以てするに過ぎぬ。さればこそ本巻に於て傳へる占

式は便筮——所謂略筮式に限るもので有ることを豫め讀者諸君に御承知を願うて置きます。(中筮本筮の精微に入るは後日とする)

○今より鐵杖が必ずウマ的の中する占法を御傳授申さうが、その前に確と諸君が下の七箇條を守るとの心證をなすつて下さい。その心證すらも出来ない其の七箇條すらも守られない人であつて見れば到底易占を行ふ資格の無い而已ならず、普通人たる資格さへも疑はしいでは無からうか。

(一) 心をば清らかに、行をば正しう。

(二)(三)

人の道に離れる占は固く之を爲さず。
つねに此の占式を崇信し、日々實占上につきて練磨
すること。

(四)(五)

此の占式を守り決して他の占式を混用せざるべし。
占を行ふ際には耳に埋め綿、眼は閉ぢ口を結び、思
邪ま死きを欲す。

(六)

判断するには少しも疑無く此の占式通りに、活潑々
地の占を爲すこと。

(七)

濫りに占を弄んで神を瀆すること莫れ、又中り中らぬ
ことありとも滯屈の心を生ぜず毎日々々不退轉の熱

煉を積み。

○ 便筮式

○ おほよそ事ありて占ふときは、心を誠にし氣を臍の
下に落著け身體正しう座りて、物音に氣を取られず、物の
黑白に眼を奪はれず、世事一切胸の鏡面に映さず、嬉しま
ず怒らず悲しまず樂しまず、損益を知らず得喪を忘れ我無
く他無く、只言ひ得べくんば神あるのみ。五十本の筮竹を
右手で取り、左手の掌もて其れの下部を支へる、右手は中

程のところに助け添へて頼の前に捧げる。さて一心不亂に祝詞を黙誦すべし。

「伏シテ惟フニ、易ハ民用ヲ前ムルノ道ニシテ卦ハ以テ神明ニ通シ感シテ斯ニ萬機ニ應ズ、茲ニ……年月日時、佳所年齢氏名……何事ニ當リテ決セズ、謹ミテ先天ノ肇教ヲ叩ク願ハクハ皇天上帝此處ニ格リ即チ以テ前程ヲ開キ其ノ善計ヲ得シメ給ハンコトナ」

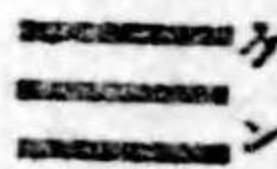
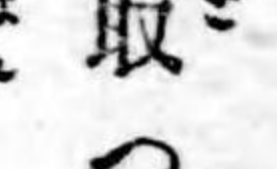
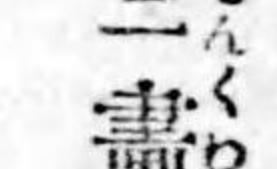
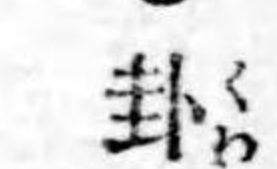


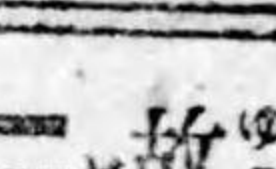

○この祝詞を唱へながら氣を十分に吸込んで下腹に收め外來の邪氣に侵されぬやうにする。五十本の中の一本人ぬき取り之を前なる机の上の筮竹筒に真直に我方へむけて

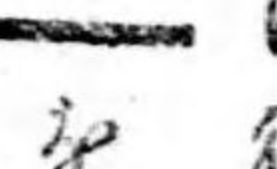
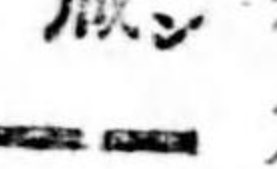
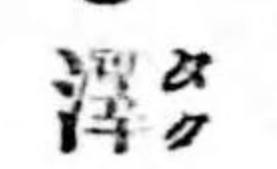
立てまして、四十九本を捧げて。

「爾ノ泰筮常アルニ籍ル、乾元亨利貞」

と三遍となへつゝ眼口を閉ぢ、天を忘れ地を忘れ我を知らず物を知らず、無念無想の瞬間潑!!!とばかり忽ち元の吾にかへれば、四十九本は颯と兩分せられてゐる。

○右手の指で左手の筮竹を八本一組の八ッ拂ひを行ふ、乾一、兌二、離三、震四、巽五、坎六、艮七、坤八である。念の爲に申す、右手の筮竹は机上の掛扱に置き其中の一本を取上げて之を左手の小指に挟んである、左手の筮竹と只今申したのは勿論是の一本をも數に入れるのである。

故に一本あまると卦木三畫を取つて  を、二本あまると  を、三本あまると  を、四本あまると  を、五本あまると  を、六本あまると  を、七本あまると  を、八本あまると  を作るのです (八本餘るとは艮七まで數へて小指の一本を入れて坤八と數へ切る場合の數ぢや)

○此様なことを兩度する、初の卦を下におき次に得た卦を上置き、下卦といひ上卦といふ、又下卦を内卦、上卦を外卦と稱へることもある上下二卦すなはち六畫全備の卦が八八の六十四種できる、其名稱は後に教へませうが  を乾爲天  を澤山咸  を雷天大壯と名づけ

てある類です。

○さて動爻といふものを得る手立を運ばねばならぬ矢張り前の如く四十九本を兩つに分け右手の筮竹を掛杖に置き一本を左手の小指無名指の間に挟み右手の指で以て左手の筮竹を數へ取り去るに今度は八ッ拂では無い、六本一組すなはち六ッ拂に取り去つて下さい、初、二、三、四、五、上、と取るので一本あまると初爻 (一番下の一畫) 二本は第二番目の二爻、三本は下より第三番目、四本は四番目、五本は五番目、六本は一番上の上爻の各動爻たることを知る、動爻たるものは一箇爻のみです。

陽爻一男、明進、大表、晝、君、善、
 陰爻一女、暗退、小裡、夜、臣、惡、

卦木の一本あれを一爻と申します、連なるを陽と名づけ断たれたるを陰と名づけ、而して陽の反対の一面は必ず陰であつて、陰の反面は陽である。一爻に四ツの表面を有するが必ずしも老少陽、老陰を分ける要は先づ々々無いものと致して置く、で卦木は折廻し二面を陽に又折廻し二面を陰に刻むことになる。

○次に爻位を荒方話して置かう、彼の易學顧問の附録

にも爻位を添へてありましたが、此に説く占式で入用なもの先づ格別無いから讀者は下の圖式をだけ記憶せられたい。



易卦は下より始まり初爻二爻三爻四爻五爻上爻と漸く上へ上へ進む、初爻二爻で地を作り三爻四爻で人を作り五爻上爻で天を作る。又初爻二爻三爻で下卦——内卦を成し四爻

五爻上爻で外卦（上卦）を成す。初爻は物の大始で上爻は大終だ、物終れば始まる故に上爻から復元の初爻に復反るを常としてある。さて陽爻をば九、陰爻をば六と稱へる故に六十四卦を通じて下の名稱が有ります。

△陽爻の方では

- 「初九」 初爻に九が居るといふ義
- 「九二」 二爻に九が居るといふ義
- 「九三」 三爻に九が居るといふ義
- 「九四」 四爻に九が居るといふ義
- 「九五」 五爻に九が居るといふ義

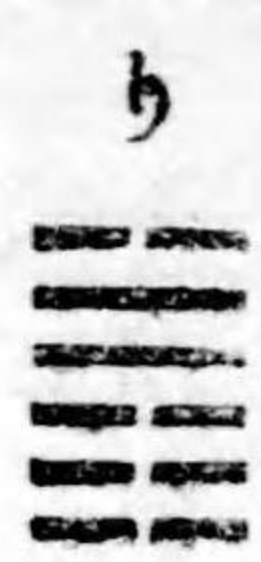
「上九」 上爻に九が居るといふ義

(初と上とは各九初九上とは云はぬ)

△陰爻の方では

- 「初六」 初爻に六が居るといふ義
 - 「六二」 二爻に六が居るといふ義
 - 「六三」 三爻に六が居るといふ義
 - 「六四」 四爻に六が居るといふ義
 - 「六五」 五爻に六が居るといふ義
 - 「上六」 上爻に六が居るといふ義
- (初と上とは六初六上とは云はぬ)

されば前に教へて置いた卦の取方によりて得らるゝ六十四種中の或一卦、それを本卦と申して、そして動爻が本卦の何の爻に當るのか……初爻か二爻か三爻か四爻か五爻か上爻か……それを見て陰爻か陽爻かを見た上で假に本卦が澤山咸で動爻が下から三番目とするると陽九が三爻に居る故九三だ、即ち之を「澤山咸の九三爻」と呼びます、或は略して單に「咸の九三」もしくは「咸の三爻變」など申すこともあり又或は「咸の萃に之く」とか「咸の萃」とも申します、之くとは動爻を裡面に反へして變形する所の卦を爾云ふので此では咸卦の九三が裡に反すれば六三にな



この通りの形に變る之を澤地萃の卦と云ふからである、さて斯様に變形するものを名づけて變卦もしくは之卦申しますと謂うて宜しい。

お解りだらうね、以上が便箋式で卦爻を得る順序——名稱運用——で御座いますから若し解らない御方は、も一度篤と御熟讀を願ひ度いものです。

○ 卦象納甲

○ 今より漸く進みて活斷の基礎たるべき諸ろの約束法を詳しく明かして、少許諄々しいほど密やかに説くから、

諸君は一々之を心に記憶して少しも忘却しないやうに希つて記さします。記憶は屢ば熟讀し注意を拂ふ人の頭に宿るので彼の電信讀や汽車旅行眼では決して記憶の出来るもので無いことは先づ御心得の筈と思ふ。

○八卦の性質から御話を致さう、

| | | | | |
|--|-----|---|----|-----|
| | 乾は天 | 金 | 北西 | 秋冬間 |
| | 兌は澤 | 金 | 西 | 秋 |
| | 離は火 | 火 | 南 | 夏 |
| | 震は雷 | 木 | 東 | 春 |

巽は風、木、南東、春夏間

坎は水、水、北、冬

艮は山、土、北東、冬春間

坤は地、土、南西、夏秋間

右の天澤火雷風水山地は八卦の本質で、金火木水土土は五行（木火土金水）を配當したもので、北西や西や南や東や南東や北や北東や南西それは方位の配當で、秋冬間とか秋とか夏とか春とか春夏間とか秋冬間とか春夏秋冬間とかいふのは十二月即ち一年を八卦に配つたのちや。

く記憶なきい。

○次に五行の生剋を教へます、

(イ) 五行相生は

木は火を生ずる || 木生火といふ、

火は土を生ずる || 火生土といふ、

土は金を生ずる || 土生金といふ、

金は水を生ずる || 金生水といふ、

水は木を生ずる || 水生木といふ、

(ロ) 五行相剋は

木は土を剋する || 木剋土といふ、

土は水を剋する || 土剋水といふ、
水は火を剋する || 水剋火といふ、
火は金を剋する || 火剋金といふ、
金は木を剋する || 金剋木といふ、

(ハ) おなじもの相對し相會するものは

木旺木 || 木の比和といふ、

火旺火 || 火の比和といふ、

土旺土 || 土の比和といふ、

金旺金 || 金の比和といふ、

水旺水 || 水の比和といふ、

この生——剋——和——の三者は本卷占式の骨髓ともいふべきものである、時の上に於ける生剋和、卦の上に於ける生剋和、爻の上に於ける生剋和など種々様々な活用が随處に行はれるので、又時の上に五運といふがある其れは斯様です、(月は陽曆です)

(い) 二月三月は木、四月は土、五月六月は火、七月は土、八月九月は金、十月は土、十一月十二月は水、一月は土とする

(ろ) 卦性や爻性を月性の前に對照して左の通りに定めるのちや、

- (一) 卦若しくば爻が月之性と比和するは旺、
 - (二) 卦若しくば爻が月之性に生せられて相、
 - (三) 卦若しくば爻が月之性に剋せられて死、
 - (四) 卦若しくば爻が月之性を剋するのは囚、
 - (五) 卦若しくば爻が月之性を生ずるのは休、
- これを五運——旺相死囚休と申して殊に運勢占の配月法に於て必要がある善く記憶なさい。

○ 次には六十四卦に納甲六親世應身をつける約束ですが、卦と下卦とに區分して圖式を以て明示いたさう。

上卦

下卦

| | | | |
|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 震 戌庚土 申庚金 午庚火 | 離 巳己火 未己土 酉己金 | 兌 未丁土 酉丁金 亥丁水 | 乾 戌壬土 申壬金 午壬火 |
| 震 辰庚土 寅庚木 子庚水 | 離 亥己水 丑己土 卯己木 | 兌 丑丁土 卯丁木 巳丁火 | 乾 辰甲土 寅甲木 子甲水 |

| | | | |
|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 坤 酉癸金 亥癸水 丑癸土 | 艮 寅丙木 子丙水 戌丙土 | 坎 子戊水 戌戊土 申戊金 | 巽 卯辛木 巳辛火 未辛土 |
| 坤 卯乙木 巳乙火 未乙土 | 艮 申丙金 午丙火 辰丙土 | 坎 午戊火 辰戊土 寅戊木 | 巽 酉辛金 亥辛水 丑辛土 |


乾の内卦には甲を納れ外卦には壬を納る、
 兌は内卦にも丁を納れ外卦にも丁を納る。

離は内卦にも己を納れ外卦にも己を納る、
 震は内卦にも庚を納れ外卦にも庚を納る、
 巽は内卦にも辛を納れ外卦にも辛を納る、
 坎は内卦にも戊を納れ外卦にも戊を納る、
 艮は内卦にも丙を納れ外卦にも丙を納る、
 坤の内卦には乙を納れ外卦には癸を納る、
 それから乾——震——坎——艮——の四卦は陽卦なれば十
 二支を爻に配るに下の爻より始めて上へ進んで附ける、又
 兌——離——巽——坤——の四卦は陰卦なれば十二支を配
 るに上の爻より始めて下へ退いて附ける。

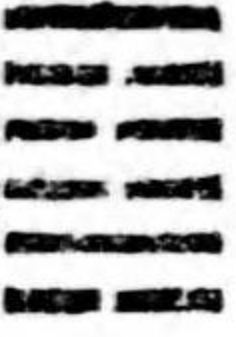
陽卦には甲丙戊庚壬の陽干が付き陰卦には乙丁己辛癸の陰
 干がつきますので、従つて十二支に在つても陽支——子寅
 辰午申戌の六ツは陽卦に配られるが、陰支——丑卯巳未酉
 亥の六ツは陰卦に配られる實に納甲法は整々たるものぢや。
 『乾金甲子外壬午』といふ句を記憶せられよ、乾は内卦の
 初の爻を甲子とし中の爻を甲寅とし上の爻を甲辰とする、
 外卦の初の爻即ち四爻を壬午外卦の中の爻即ち五爻は壬申
 外卦の上の爻即ち上爻は壬戌、此通りに下爻より子寅辰午
 申戌と陽支を進めて順につけてゆくのである。又『坤土乙
 卯外癸丑』といふ句を覚えて下さい、坤は内卦の上の爻即

ち三爻を乙卯とし中の爻即ち二爻を乙巳とし下の爻即ち初爻を乙未として、卯巳未と陰支を退けつゝ順につける。さて外卦の上の爻即ち上爻を癸酉とし中の爻即ち五爻を癸亥とし下の爻即ち四爻を癸丑と順に酉亥丑と退下して納甲をつけるのちや。

又一例を擧げると句に此様なのが有る 兌金丁丑外丁未

「離火己亥外己巳」これに據つて納甲をつけるると内卦に離卦を得て外卦に兌卦を得たる  この卦の如きは、先づ内卦の離は陰卦だから下り退けて支をつけるのちや離火の内卦は三爻を己亥とし二爻を己丑とし初爻を己卯とつける。

外卦の兌も陰卦だから矢張り下り退けて支をつけるのちや兌金の外卦は上爻を丁未とし五爻を丁酉とし四爻を丁亥とつけるのちや。

又一例を示さう 「坎水戊寅外戊申」「艮土丙辰外丙戌」の句を覺けなさい  此様な卦を得るときは内外ともに陽卦で何れも陽支を上り進めて附ける、先づ内卦の坎水は初爻を戊寅とし二爻を戊辰とし三爻を戊午とするのちや、外卦の艮土は四爻を丙戌とし五爻を丙子とし上爻を丙寅とつけるのちや。

又一例を示さう 「巽木辛酉外辛卯」「震木庚子外庚午」の句

を覺わなさい ䷗ の卦の如きは内卦の巽木は陰卦である
 故陰支を下り退けて附ける先づ三爻を辛酉とし二爻を辛亥
 とし初爻を辛丑とするのちや。外卦の震木は陽卦である故
 陽支を上り進んでつける先づ四爻を庚午とし五爻を庚申と
 し上爻を庚戌とするのちや。以上の諸例を見て各卦に納甲
 をつける原則を會了せられるで有らうと思ふ。
 少し申後れて御面倒なれど忘れぬ間に申して置かう、『亥子
 は水』『寅卯は木』『巳午は火』『申酉は金』『丑辰未戌は土』是
 が爻之性です。

○次に三官を附ける仕方を教へる三官とは何ぞや世爻

應爻身爻の三つちや、世爻とは道はハ一卦の魂である世と
 は世繼の爻とも申すべきもので一卦に必ず一箇を有してゐ
 るが應爻は世爻から二爻間て、世爻と對ひ合で世爻が二爻
 に在れば應爻は五爻にあるといふ例なり、又身爻も一卦に
 一箇づゝ有つて以上三者を當流で三官若しくは三役と稱へ
 てゐますから是三官の何れでも無い爻をば平の爻又は只の
 爻と申してゐる。力を以て比べるときは世が三で應が二で
 身が一の割合と思へ。

○世應の命け方から云へば、凡そ六十四卦中に於て上
 卦下卦相同じきもの八ッだけ有りて之を『八純卦』といふ

其の純卦には各上爻に世を宿してゐる、他の五十六卦一として上爻に世の宿る卦面は有りませぬ。それは五十六卦は各七卦づゝ各一純卦から生れたるものとする故で高い位にて五爻に世が見るゝのを五世の卦と唱へる其れまで進めば上爻へは上ることを許さぬのちや。

八純卦は何卦も世は上爻に宿り而して間二爻を挾んで三爻に應が宿る。

(一) 世が上爻にあり應が三爻にあるもの八卦これを純卦

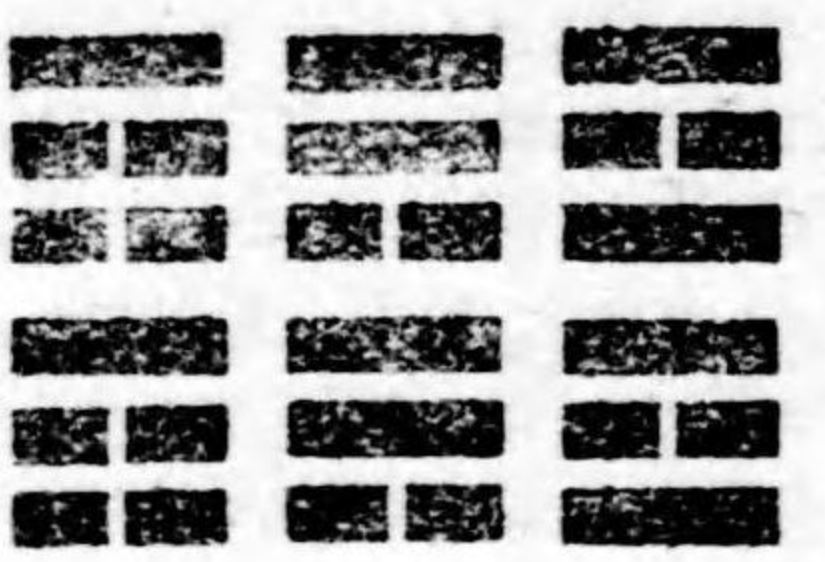
母卦と謂ふ、



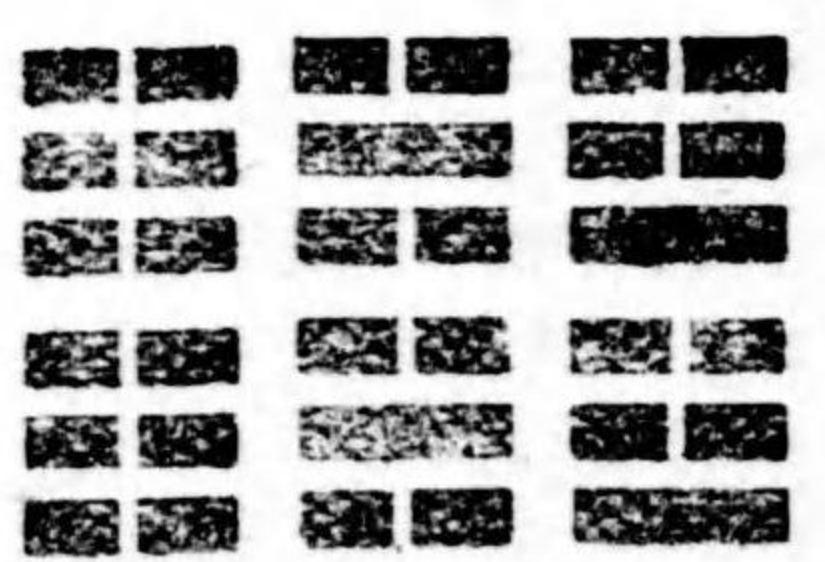
乾爲天



兌爲澤



離爲火
巽爲風
艮爲山



震爲雷
坎爲水
坤爲地

(二) 世が初爻にあり應が四爻にあるもの八卦これを一世の

卦と謂ふ、



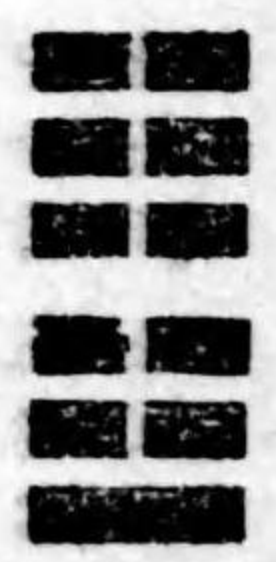
天風姤
火山旅
風天小畜



澤水困
雷地豫
水澤節



山火賁

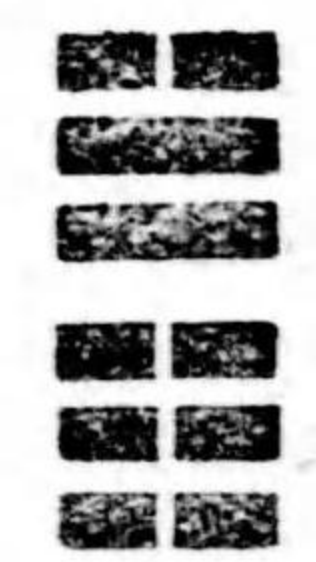


地雷復

(三) 世が二爻にあり應が五爻にあるもの八卦これを二世の卦と謂ふ



天山遯



澤地萃



火風鼎



雷水解



風火家人



水雷屯



山天大畜



地澤臨

(四) 世が三爻にあり應が上爻にあるもの十六卦所謂三世

の卦八、所謂歸魂の卦八、



天地否



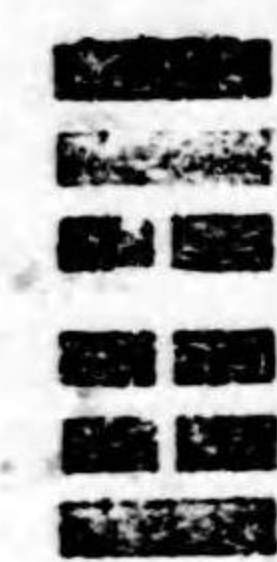
澤山咸



火水未濟



雷風恒



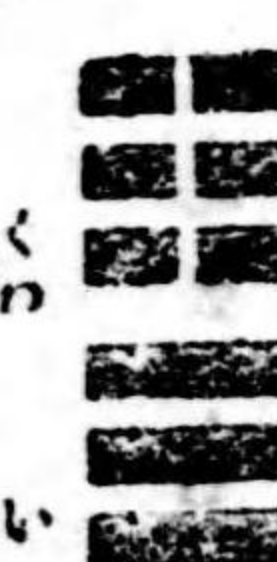
風雷益



水火既濟



山澤損



地天泰

(以上を三世の卦と謂ふ)



火天大有



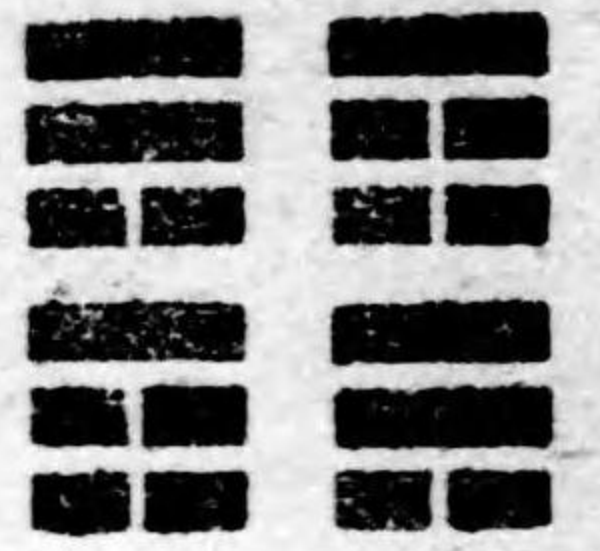
雷澤歸妹



天火同人



澤雷隨



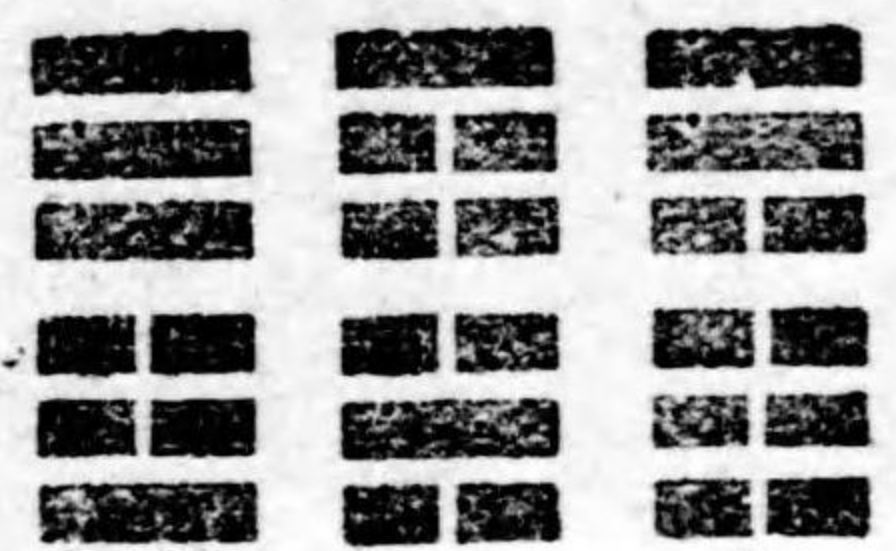
山風蠱
風山漸



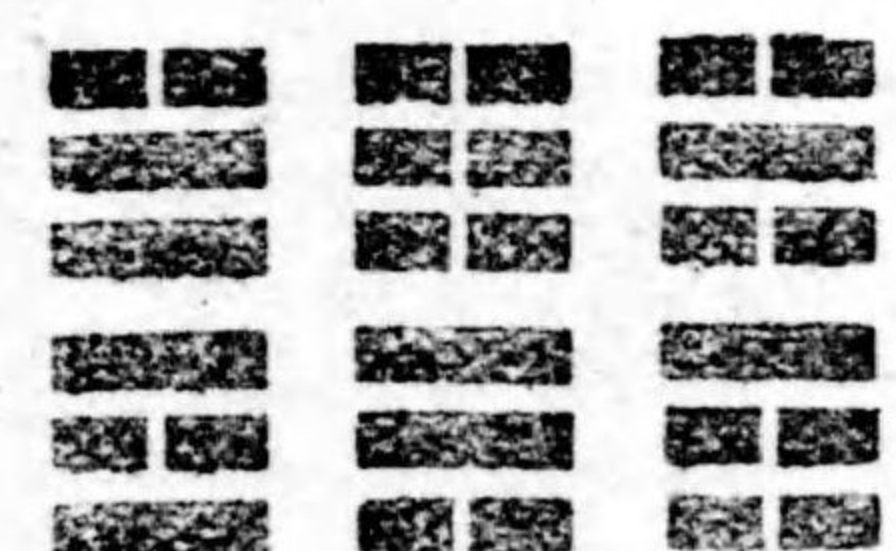
地水師
水地比

(以上歸魂の卦)

五) 世が四爻にあり應が初爻にあるもの十六卦、所謂四世の卦八、所謂遊魂の卦八、



風地觀
山水蒙
天雷无妄



水山蹇
地風升
澤火革

(以上は四世の卦)



火澤睽



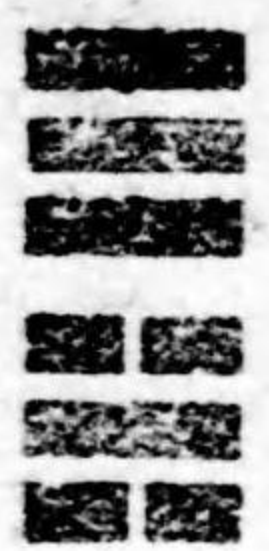
雷天大壯



火地晋



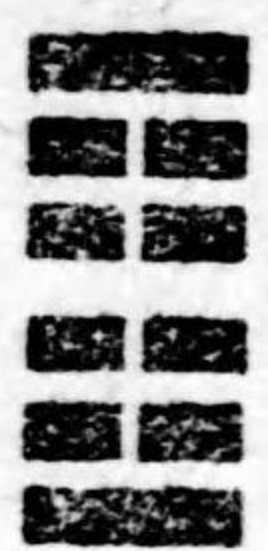
雷山小過



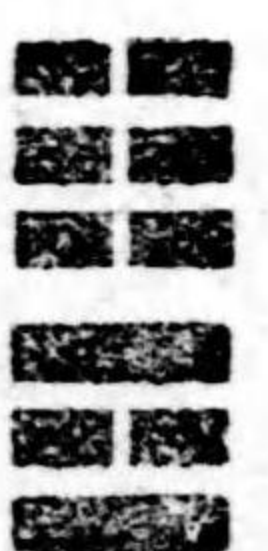
天水訟



澤風大過



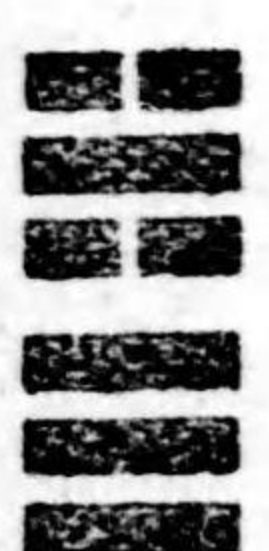
山雷頤



地火明夷



風澤中孚

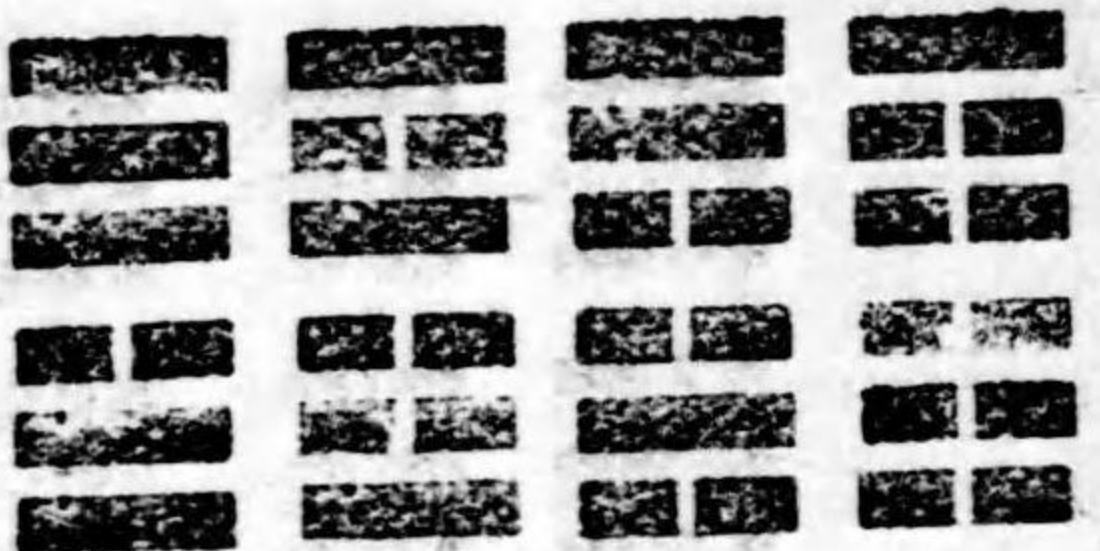


水天需

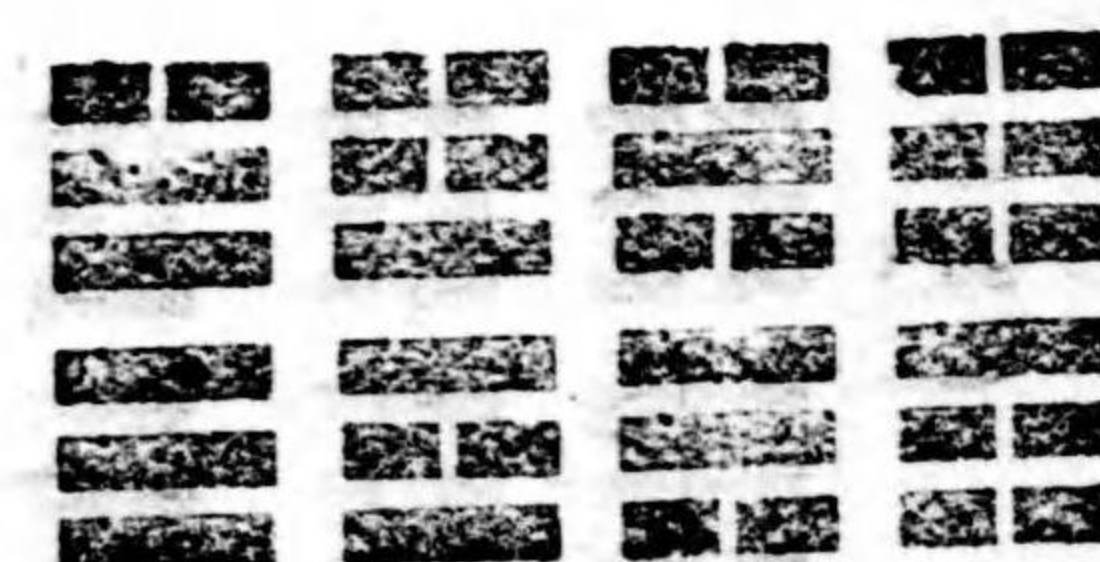
(以上は遊魂の卦)

六) 世が五爻にあり應が二爻にあるもの八卦これを五世の

卦と謂ふ、



山地剝
風水渙
火雷噬嗑
天澤履



地山謙
水風井
雷火豐
澤天夬

○右六十四卦の卦之性を教へるために左に圖式を以て各純卦より生れいでたる七卦づゝを其の母卦と純卦の下に配屬して一目瞭然たらしめる。左圖縦行は則ち同性の屬で横列は則ち異性の而も世應の位置相同じきもの。

| | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| | | | | | | (純卦) |
| 坎 | 巽 | 震 | 離 | 兌 | 乾 | (卦性) |
| …水… | …木… | …木… | …火… | …金… | …金… | (一世) |
| 節 | 小畜 | 豫 | 旅 | 困 | 姤 | (二世) |
| 屯 | 家人 | 解 | 鼎 | 萃 | 遯 | (三世) |
| 既濟 | 益 | 恒 | 未濟 | 咸 | 否 | (四世) |
| 革 | 无妄 | 升 | 蒙 | 蹇 | 觀 | (五世) |
| 豐 | 噬嗑 | 井 | 渙 | 謙 | 剝 | (遊魂) |
| 明夷 | 頤 | 大過 | 訟 | 小過 | 晉 | (歸魂) |
| 師 | 蠱 | 隨 | 同人 | 歸妹 | 大有 | |



艮

：土：

賁

大畜

損

睽

履

中孚

漸



坤

：土：

復

臨

泰

大壯

夬

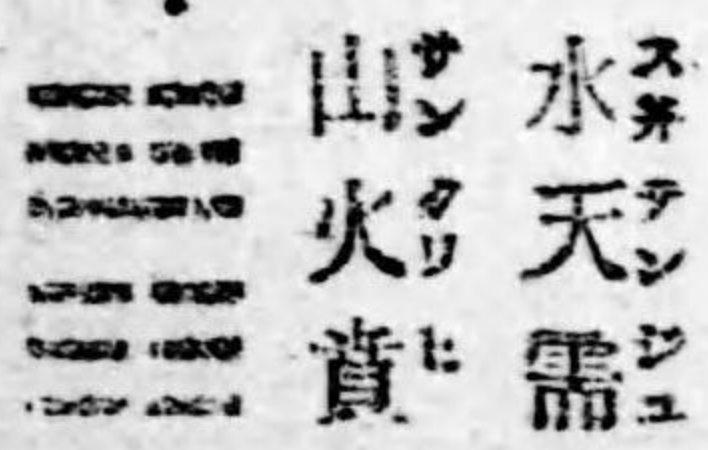
需

比

この圖式の通り姤とか遯とか觀とか大有とかいふ卦は皆乾爲天から生まれたものである故に同じく金性の卦と見て宜しい、又豫や解や恒や升や隨は皆震爲雷から生まれたものである故に同じく木性の卦と見て宜しい、其他みな之に準じて知悉して下さい。

○次には身爻の命け方を話さう、左の六箇條さへ記憶したなら何の難いことも有るまいと思はれる。

世爻が子の爻か午の爻なれば「初爻」が身、
 世爻が丑の爻か未の爻なれば「二爻」が身、
 世爻が寅の爻か申の爻なれば「三爻」が身、
 世爻が卯の爻か酉の爻なれば「四爻」が身、
 世爻が辰の爻か戌の爻なれば「五爻」が身、
 世爻が巳の爻か亥の爻なれば「上爻」が身、
 右の規則を用いて例を引けば 震爲雷の卦の世は見よ成の爻である、故に五爻に身が宿つてゐます、
 の卦は申の世であるから三爻に身が居ます、
 の卦は卯の世であるから四爻に身が止まつてゐます、



雷地豫の卦は未の世であるから其れ二爻に身が見はれる、
 雷天大壯の卦は子の世で初爻が身だらう、
 山謙の卦は如何ん亥の世爻なれば身は上爻ぢや。
 地

○用神式

○それから進むと用神六親であるが用神とは諸種の占
 判を行ふに其れ々々入用の爻で一層詳しく月せば各種の占
 庭に主要となり必需の物となつて働いて呉れる爻の名であ
 るのだ。「卦の性」「爻の比和」「爻の能生」「爻の受生」「爻の能
 剋」「爻の受剋」これを六親といふ六神——六身みな同義で

ある、爻の上では五ツだから又稱して五類といふ人もある
 吾輩は寧ろ後者を取るののであるが何でも名は可矣。

○以前に溯つて卦之性を諄々教へる必要もあるまい諸
 君が既に御承知の卦の性に對して其の爻之性なるものが(木
 爻とか水爻とかの爻之性)和生剋の如何にあるかを見て此
 に兄弟——父母——子孫——官鬼——妻財——の五者を作
 ります。

卦性と和する爻性を以て「兄弟」とする、
 卦性を生ずる爻性を以て「父母」とする、
 卦性から生ぜらるゝ爻性「子孫」とする、

卦性を剋する交性を以て「官鬼」とする、
 卦性から剋せらるゝ交性「妻財」とする、
 この五則をさへ記憶せられて居れば易々と六親をつけるこ
 とが出来ることが例によりて次に例證をあげて示して置かう。

((卦性金))

- 乾 爲 天 (世) 戌壬 土 (卦 父 生 天)
- ☰ (身) 申壬 金 (卦 父 比 天)
- ☲ 午壬 火 (卦 父 剋 天)
- ☷ (應) 辰甲 土 (卦 父 生 天)
- ☱ 寅甲 木 (卦 比 剋 父 天)
- ☵ 子甲 水 (卦 比 剋 父 天)

乾爲天か兌爲澤の如き金性の卦及び其れより生れし所屬の
 金性卦は皆右と同様な關係ぢや、

- (父 天)
- (兄 弟)
- (官 鬼)
- (母 天)
- (妻 財)
- (子 孫)

((卦性木))

- 无 (世) 戌壬 土 (卦 剋 天)
- ☱ 申壬 金 (卦 剋 天)
- ☲ (世) 午壬 火 (卦 剋 天)
- ☷ 辰庚 土 (卦 剋 天)
- ☱ 寅庚 木 (卦 比 和)
- ☵ (應)(身) 子庚 水 (卦 生 天)

- (妻財)
- (官鬼)
- (子孫)
- (妻財)
- (兄弟)
- (父母)

この様にして六親を命ければ宜しいので夫の比和とは卦性
 爻性相同じきもの、能生とは爻から卦を生ずるもの。受生
 とは爻が卦より生ぜらるるもの、能剋とは爻から卦を剋す
 るもの、受剋とは爻が卦より剋せらるるものぢや。



○伏神といふものが有ります、伏神とは得たる卦の面

に見えずして本宮に伏れてゐる用神 (六親の各一) が即ち
 其れぢや。本宮とは各の母卦 || 純卦の納甲を左様申すの
 で、一母卦には七ツの子卦がある、例せば乾爲天といふ一
 母卦には姤、遯、否、觀、剝、晉、大有の七子があらう其
 七子卦の中に何の卦でも六親 || 五類が五ツ悉く備はりた
 る卦ならば差支も有るまいが、同じ類が多く見れても一類
 若しくは二類卦面に見えぬ用神があるときは占に臨んで折
 角入用の用神が出てゐないとすると、さア大變！、何とせ
 う、！！。

諸君心配するには及ばぬ其時には其卦を生んで呉れし母卦

を尋ねて見たまへ、母卦には必ず居然と五類が悉く備へて
 ありますから其れを貰つて来れば可也のだ。たゞ念のため
 に申して置くが自分の手に使ふべき通貨が備へてある時に
 は決して生家へ推かけて生母の臍繰金を引出すやうな不都合
 を立働かないことを呉々も忠告して置くので、要するに
 伏神は得卦の卦面の納甲五類（飛神と稱する）が悉く備しな
 い場合に限つて用ゐるものと思へ。

○ 澤山咸の卦は妻財爻が無い、だから其の母卦兌爲澤
 の二爻にある妻財を取て来て咸卦の左方の二爻に置くのち
 や。（飛神は凡て右方に置くといふ定め）山澤損の卦は子孫

爻が無い故に其の母卦艮爲山の四爻にある子孫を拜借して
 来れば済む。

○ 飛神伏神の納甲六親が理會せらるゝと今度は空亡
 といふことを教へたい、全體この空亡といふは妙用あるも
 ので或爻は或時に於て力の作用を失ふこととなり或占に於
 ける吉神の爻が空亡するため吉事も凶となることがあり
 又凶神が空亡するため凶兆も吉に變はる場合もあります。
 まづ舊曆の毎月に於ける「甲の日」を見よ、或甲の日に始
 まつて次の甲の日の前日までの十日間は毎日或爻が十日間
 の空亡を續ける、卦に其爻あれば空亡若しくは旬空と唱へ

て無力爻と認めめるのです、

甲子日より十日間は戌又は亥の爻が空亡、

甲戌日より十日間は申又は酉の爻が空亡、

甲申日より十日間は午又は未の爻が空亡、

甲午日より十日間は辰又は巳の爻が空亡、

甲辰日より十日間は寅又は卯の爻が空亡、

甲寅日より十日間は子又は丑の爻が空亡、

空亡の爻は次の甲の日が来ると免除となるといふ規則です。

さて空亡の例をも擧げう、

丙辰日に地天泰の卦を得たれば初爻と四爻とが空亡ぢや、

丙辰は

「甲寅の旬中」第三日目である甲寅より十日間は

子丑の爻を空亡とする故に泰卦では初爻の子、四爻の丑

この兩所に空亡を見る。

癸丑日に得たる山天大畜の卦では二爻の寅と上爻の寅と

が空亡です、癸丑日は「甲辰の旬中」第十日の尾りで甲

辰より十日間の空亡は寅身爻であるからぢや。

戊戌日に起りたる雷火豊には空亡の爻が無く六爻皆有力

である、それは何故ぞと申すに戊戌日は「甲午の旬中」

で第五日目に當り甲午以後十日間の空亡は辰又は巳の爻

なるに、見よ々々雷火豊の卦に何位に辰がある？、何位

に已がある？。

○次に本卦と變卦との爻に就て名分を正して置きたい、夫れ本卦は多くの場合に於て現在のことを占ひ或時には過去のことを占ふこともある。之卦——變卦は多くの場合に將來のことを占ひもし或時は現在を占ふこともあり別して或方道を用ゐて物を變ずるの結果にも擬て若しくは或情偽のために事の新生面を開くの兆とも看做すことがある、名分を正すとは其れを謂ふのでは無い。外にある。

- (一) 本卦的變爻
- (二) 變卦的變爻

この分別を正しく記憶に印して貰ひ度いのである、本卦的變爻とは本卦の動爻をば動かして其變じ之く爻の納甲を取り之を本卦動爻の位置に並べて置いて其五類の命け方は矢張本卦の卦性に對して和生剋を察して兄弟とか子孫とか妻財とかを定めて使用するものです。又變卦的變爻に於ては其の變じ之きたる爻を其のまま變卦の一員として勿論變卦の他爻同様に變卦の卦性に對して和生剋を察し父母とか官鬼とかいふ五類を定めるのだから、實占上にて頗る大なる相違が生ずることも有らうと思ひます。同性なる本卦變卦を得た場合——例へば坤が五爻變じて比に之く如きは本卦

的變爻も變卦的變爻も同じ五類の兄弟ぢやから可けれども、
 若夫れ異性の本卦變卦を得た場合――例へば坤が上爻變じ
 て剝に之く如きは本卦的變爻は「丙寅木官鬼」なれども、
 變卦的變爻は「丙寅木妻財」となるの相違が出来るぢや無
 いか、是は畢竟本卦の性は坤土で、變卦の剝卦は金性（剝
 は乾金五世の子卦）である故に左様なるので有ると御認め
 なさるでせう。

○體用真訣

○體用といふことが有る、各種の占に通じて最大切な

ことだから特に意を注いで貰はねばならぬ、體とは何？、
 用とは何？、

六爻を二分して上卦下卦とし、動爻のある方が用卦で、
 動爻が無い安靜な方が體卦である、故に動爻が初爻か二
 爻か三爻かに在れば必ず上卦が體で下卦が用となり、
 又若し動爻が四爻か五爻か上爻かに在るときは必ず下卦
 が體で上卦が用となります。體は多くの場合に於て或物
 或事或人の主體となり、用は多くの場合に於て或物或事
 或人の機關となり若しくは四圍の情偽形勢となり或は一
 の對立者となる。

○また以外に「體之主爻」「用之主爻」といふものが有る、而して正格と變格とが分たれてあるのちや。正格は常に多くの占式に使ひ變格は一二例外の場合に用ゐらるゝものと思へ。

(一) 正格にては用卦の中爻と體卦の中爻とを爾云ふ、用卦の中爻が用之主爻である、體卦の中爻が體之主爻である、故に正式にては常に二爻と五爻とが相互に體主たり用主たるのちや。

(二) 變格にては動爻を以て直に用之主爻とする、而して中二ツの爻を間てたる對爻を以て體之主爻とするのちや、

即ち六爻が何が主爻になるか典常は無いが但だ注意すべきは初爻と四爻と、二爻と五爻と、三爻と上爻との如く毎に相對するを法としてある、之を要するに正格は二五の對爻に限るけれども、變格は二五の外に尙初四、三上の對爻を用ゐらるゝ此様な差違を見るのです。

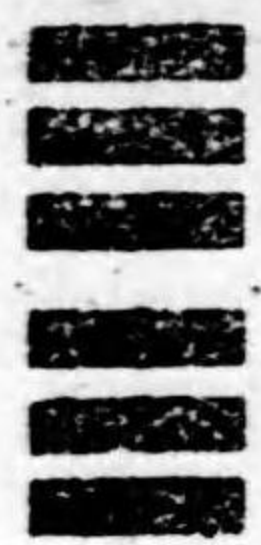
これまで詳しく申しした諸般の事件を深く確に腦裡に印銘せられしこと、信じ此上に六十四卦の大意を教へたる後には、直ちに『的中の易』に取掛るのちや。楽しいでは無いか。

○六十四卦の大意は何等の占事にも多く或は少く活用

せらるゝものである、下に毎卦を説くに當り一見矛盾するの意があり義があり事があり物があるけれども其れが易卦の妙用で、同じ、雷地豫の卦でも『忘る』とも觀れば『働く』とも觀るし、又山雷頤の卦で或は之を『争ふ』と看做し或は之を『協議』とするの類で吉卦も凶となり凶卦も吉となり機に臨み變に應じ活潑々地の作用が自在縦横にも吉のちや、六十四卦の大意活用は其人に存す、宜しく活眼を開いて斯の活書を讀め。

短檠や 紙子の夫子 易を讀む
 讀ぎして新嘗祭の米撰らん

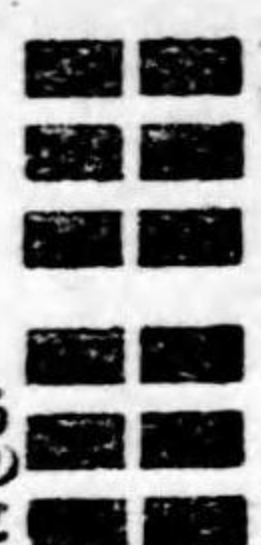
(杖)



乾爲天

(此卦は萬有を綜核る)

○その徳は健、其質は純、大とし、高しとし、勉むる、争ひ競ふ、始める、治まる、明るい、暗い、覆ふ、平らか、深い、長い、圓い、厚い、浮ぶ、軽い、強固なもの、進歩變化、奮發、積極的、貴物、至寶、靈妙、天、君、父、天子、首、頭取、貴人、榮衛、權利、



坤爲地

(物質的百物を兼有する)

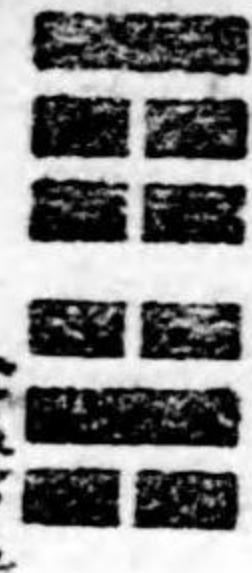
○其徳は順、其質は駁、弱し、怠る、薄小、細い、近し、靜止、保守、退嬰、終る、危し、平らかで無い、義務、載る、暗い、地、臣、母、婦人、腹、布帛、釜、消極的、沈下、太陰、老女、勞働、亂れる、柔軟物、後れる、制裁が無い、憂患、暗劣、トンチル



水雷屯

(沮滯の義、一進一退す)

○坎水前にあり震むに難む、我進んで説けども彼邪見にして應せぬ
屈する、難む、安からぬ、屯留する、未開、滯屈、妨害、能く時局の難
を濟ふ、自家の難によりて他を救ふに暇あらず、難きを忍びて成功に近
づく、風車、引舟、洋筆、噴水、亂舞、狂亂、



山水蒙

(鷄鳴いて夜なほ明けず)

○艮山高し登るべからず坎水下に危し渉ること難し、我は智彼は貪
彼は功利の念薄く我は德行に少く、無智、苦勞、迷ふ、隠して見さず、
學ぶ、教を求む、進退谷まる、土左衛門、箒、岩清水、須彌段、佛前に
花、安からず、明に向ふ、人の力を借る、頑陋、



水天需

(待つ、求む、理想)

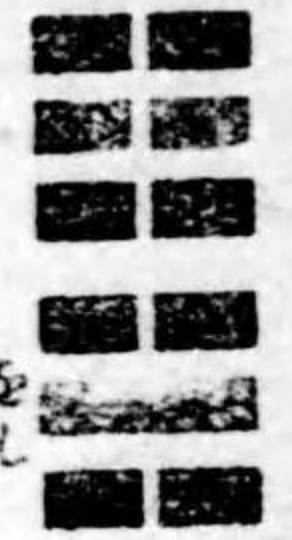
○暫く止まりて將に進行せんとす、潤澤を望む、徳を布く、利益を
分つ、我は明にして剛彼は頑にして陰險ぢや、需用あまりあつて供給足
らず、眼高し手低し、盛んにハイカラを氣取る、征伐、外套、柱時計、
電話、糸車、紡績會社、上奏、輿論、外交家、



天水訟

(告げる、訴ふ、違ふ)

○勞して功無し、他を羨む、相争ふ、彼此合はぬ、剛強相下らず、
請託を斥ける、失望落膽、悔の八千度甲斐ぞ無き、心和平ならず、喧々
相詬る、賣て利無く買ふに損あり、印肉、卵石、遊弋艦隊、洪水、襲撃、
伴食、人のために迷惑、貞正なれば凶變じて吉、



地水師

(徳高く道善なれば吉)

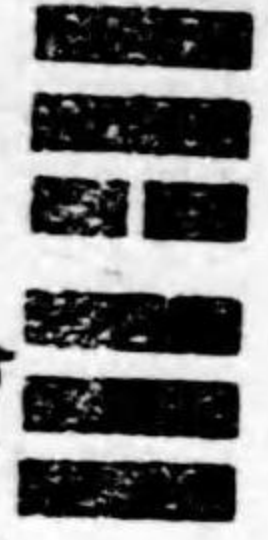
○ 教へる、軍陣、先に憂ひ後れて樂む、進取、服従、規律正しい、始あり終あり、始を戒めよ、飽くまでも、我れ主たり、亂れて後に定まる、確定、攻勢、嚴守、模範、一燈を以て多室を照す、石のルーラを地にまろばす、開墾、長驅猛進、我れ有し衆従ふ、



水地比

(好く合ふ)

親しむ、比ぶ、較べる、共同、衆を會す、暗中の光明、我れ順にして彼正し、統治、君主獨裁、政黨、徒黨を集める、和衷、神殿の主體、佛寺の本尊、姿見の鏡、四阿、梵天、幣帛、風船飛揚、關門、税關、迷を轉じ悟を開く、燈臺、合資會社、御前會議、



風天小畜

(大器は晩成、先散後收)

○ 小し蓄へる、少し留まる、少し沮めらる、小なるもの大なるを制す、柔克ち剛行はれぬ、希望、硝子越の花見、尺進尺退、人のために説破せらる、他より事起る、用意して待つ、我志確ければ人に欺かれず、貯藏心、吹子、雪隠、二重マント、金庫、



天澤履

(慎重にして勇往せよ)

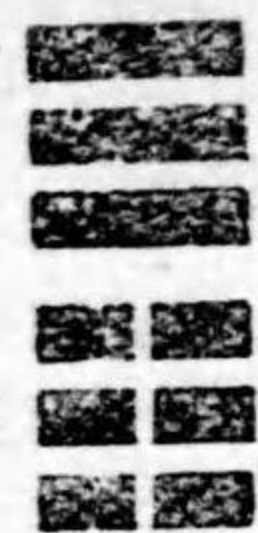
○ 試みる、危い、物堅い人、危きに慎んで事を成す、雲合ばかりで雨ふらぬ、此の瀬戸一つで、大雨沛然、冒險、外交、海外貿易、周旋業、談判、説論、遊説、禮節を守る、陰に詭り陽に褒める、起重機、汽笛、水上の鐵道、水道鐵管、質同じくて上強く下弱し、



地天泰

(物其處を得る、油斷大敵)

○平らか、穩か、安し、驕慢、治まる、富む、豊かな、施與、隆盛、怠る、樂しむ、君子進み小人退く、夜明けて人皆業に就く、安に馴れて亂を招く、我賢にして人従ふ、列車進行す、新發明品、博覽會、拂子、調子よく、配合の美、守成の器を必要とする、



天地否

(塞りて後に通ずる、屈辱)

○ふさがる、危い、難む、勉強する、暗夜、沈む、貧しい、失却、戒む、勞働、小人進みて君子去る、我人に従へば助けられる、弱の強を挫き、柔克剛を制する、難きに忍んで安に就く、地に穀物あり、蔓生植物、菊花、雁行の形、壓迫せらるゝ、草屋に群鳥、



天火同人

(外に交り、博く問ふ)

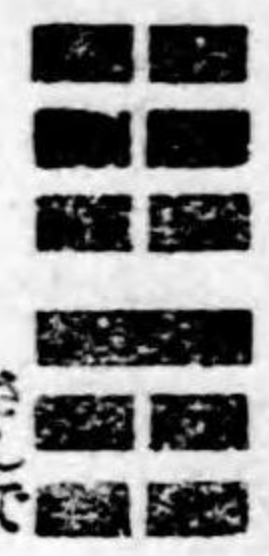
○共和、合力する、親睦、奇遇、明白、發見、利益、來福、勝つ、進む、行く、幸福な時、輕信する、衆の力にて成す、我は明かに人は貞し、興望、名譽、公争する、綜合、羅織、連鎖比例、聯念、望む、遠謀長計、望遠鏡、炬燵、電氣作用、龍田川に紅葉、



火天大有

(文化燦然)

○富有、實物、充滿、多大、暴強、榮轉、賞賜、利得、進取、製産、人の信用あり、已を虚しうして人に聽く、師たり、長たり、牡雞が旦にする、美、女主、貯蓄、廣く布く、普遍的、外賢内愚、寛洪ぢや、豐光ぢや、天文臺、火見臺、太陽南中、空中飛行船、



地山謙

(志大にして禮恭し)

○差出ぬ、懐らぬ、用意と一のふ、三軍令を待て動かす、材料を集める、進むべく先づ退く、弱を示して強を制す、實るほど頭の下る稻穂かな、忍耐、彼は柔弱我は頑愚、堅守して俗に染まぬ、十にして五六を使ふ、團扇、組板、鋸、山に雲、紙と筆、芭蕉、



雷地豫

(蟄伏を出て雄飛する)

○豫ぶ、安逸、怠る。健か、運漕、周廻、動搖、得意時代、發見する、探る、運動、渡る、打つ、得物、驚く、走る、顯はれる、自轉する、鳴る、名譽、友あり、一新、我順にして彼健、進んで取るべく退いて守るべからず、自轉車、三寶、當世式部姿、高架鐵道、



澤雷隨

(時に隨從して弛張する)

○從ふ、遊び怠る、求める、追まはす、流行する、他力を借りて用をなす、後より往く、強求、人之に應せざることを強ひて頼む、地位の移動、物之を右に得て左に失ふ、偏せず黨せず、後戻り、女權強し、偏屈者、水力電氣、水車、藝妓と客、三味線、



山風蠱

(やぶれ、善後策を講ず)

○虫ばむ、破れる、事に當る、獅子身中の虫、内に争うて外に向つて一致、人に從はぬ、やぶれて而して成る、獨立特行、手飼の犬に手を噛まれる、難局を引受る、遺産相続する、廢物利用する、退守、衆相争ふ、我は木彼は石なり、古墳、崩壊、外堅く内弱し、



地澤臨

(事に臨み物を開く)

○進む、求める、致す、教育、勉強す、我慢、健かな、有効、辛
苦して得る、我に辨才あり、彼れに負債あり、我語れば人は謹聴す、病
して癒ゆる、失せて得、もきて返り暗うして光をゆる、物漸々生長す、
扇子形、空井、印刷用肉棒、二人同行、魚網、空井、



風地觀

(明らむ、照らす、定む)

○観る、覗ふ、賭る、疑ふ、探る、留める、動かす、顯はさず、變
ずる、半ば隠れる、交る、遠く視て近さを忘れる、頑固一徹、一癖短慮
傾才利口、衰運に向へり、意外の吉凶あり、輕蔑せられる、我れ順にし
て彼れ喜ぶ、袴、綠門、穴門、調査、試験、偵偵、



火雷噬嗑

(二刀兩斷、平明公大)

○噬奪す、粉碎する、含蓄、執轡、強制、爭論、訟を聴く、刑事被
告、我は攻撃し彼は謀を廻らす、人と和を失ふ、奥齒に物の介まりたる
如く、物集まつて力を大にする、腕力沙汰、公明正大、法治國、約款を
結ぶ、相競ふ、化學的作用、法律、咀嚼する、分析する、



山火賁

(文飾、食足り教加はる)

○装ふ、彼は求むること強し我は決しない、小事に拘りて大謀を亂
る、質朴素野、外見を張れども内は火の車ちや、出でぬ隠れぬ人、山林
に居て市朝の氣あり、大仙は市に隠れる、小器用、小策を弄す、徐々に
行へ、上高く下明し、食客、乳母車、電車、墓に華、



山地剝

(剝落、段落、終局)

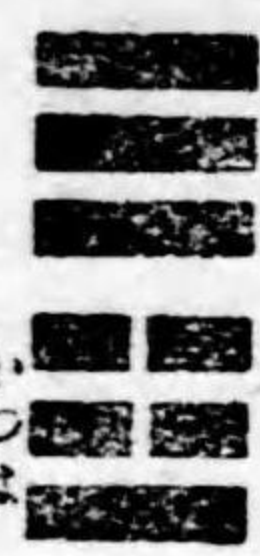
○三徑荒れて松菊なほ存す、逃亡、消失した、衰殘、破棄、舊を去れよ新に就けよ、我れ柔弱彼れ頑愚、狂人走れば不狂人も亦狂す、野分の後の絲芒、落ぶれて袖に涙のかかる時人の心の奥ぞ知らるゝ」暗、陋、賤、玉簾垂れたり、終列車去る、木守の菓實、



地雷復

(終て始まる、新進復活)

○復活の曙光、天國は近づけり、開く、失うて得る、隠れたるが見はれる、順流に掉す、力猶ほ微弱、夜あける、新に生ずる、内勇み外従ふ、「鯨賣印に刀を鳴しけり」強健にして疾走せず、物を進歩させる、公開する、汎く賢に問ふ、鞅鞅、啓行する、試験、



天雷无妄

(心赤子の如し至誠なり)

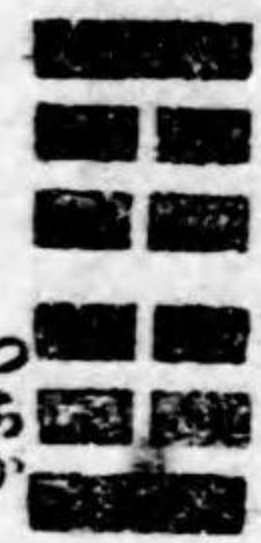
○偽らぬ、眞實、望無し、大公正明、望大なり、至孝、術策を弄せず、秀いでたる、貢ぐ、看破る、本道を歩む、邪路に入らぬ、社會主義、隠さず、外より來り集まる、事以て速に去就を決せよ、脚躡する勿れ、義俠、太鼓、三本鍬、風船たま、ゴム手毬、腰窓、



山天大畜

(大器晩成、長袖善舞)

○多錢に非ずんば善く買はじ、人大功を立てんと欲せば先づ厚く修養を欲す、實力、徒勞あり、準備する、大難、妨害、威嚇、仲裁、富饒、大利、水浅うして大魚飼、ぬ、家よりも體向し、根性魂を大きくせよ、忍耐力、高窓、洋風家屋、積粟萬石、山高帽子、



山雷頤

(民力休養、成育、教化)

○ 培ふ、包む、争ふ、向ふ、肝膽相てらす、需用供給の均勢、協議、讓歩、合資、上下志を合す、我も彼も相執て下らず、兩方より壓迫する、滋養、分配、救助、同舟、期せずして會す、和同、空球、麴室、手風琴、暗箱、行李、百箆筭、圓周、鵝蚌の争漁父の利、



澤風大過

(過大に失す、内ばにせよ)

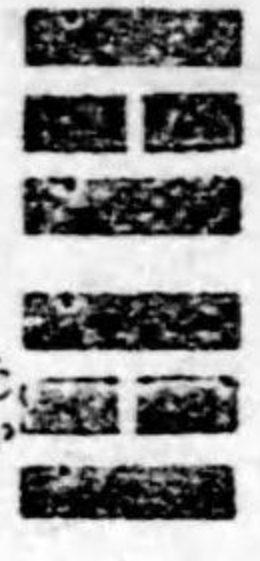
○ あやまつ、過ぎたり、溢れる、破綻、勢に過ぎて倒れる、節するを知らず、奢り、言すぎる、人と相背く、過度、意見衝突、突然なる事件、四花八裂、飛散、遠心力、彼此ともに不信、食傷の病人、大謀破れ、烟管、彌次郎兵衛、落花、蛭、珠玉に穴を貫く、



坎爲水

(貞固にして百難に堪へよ)

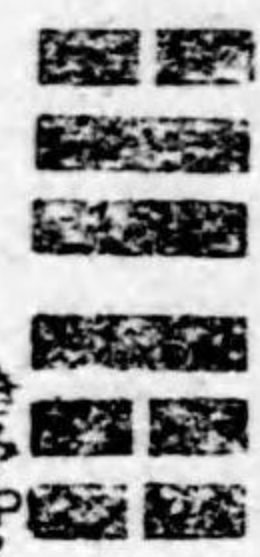
○ 暗より暗へ、落入る、難む、固却する、過つ、我も人も險念、人を咒へば穴ニツ、恪勤忠誠、勤儉貯蓄、流行する、貧苦、失意の境遇、入獄、災害、損耗、弊害、火無き處に烟は出ぬ、盤根錯節に利器を試みよ、水、煙、蜜柑、蝶番、石炭塊、墨、複雑事件、



離爲火

(柔にして明、温而栗)

○ 明るい、光る、美麗、離れる、附く、文學、出陣、進化、上臈、數へる、覗く、信認する、考へる、發見、燒却、調査、明白正確、反目、疾視、得て失ふ、柔克剛、兩眼鏡、牝牛、乳房、兩目、上壁下壁に各窓を穿つ、電話器、火吹竹、網罟、ズボン、寶石、明鏡、



澤山咸

(通達、感應作用、結合)

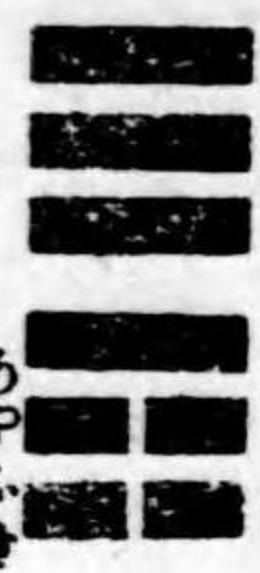
○氣脈を通ずる、感ずる、引きつける、包む、打てば響く、進むべく止まるべく、上るべく下るべく、男女相許す、敵も身方となる、我守り彼喜ぶ、我は止まり彼は進で説く、實行する、得る、遇ふ、癒ねる、服従、入懇に、衣冠束帯、女子男を孕む、寢臺、



雷風恒

(常ある、變じて存する)

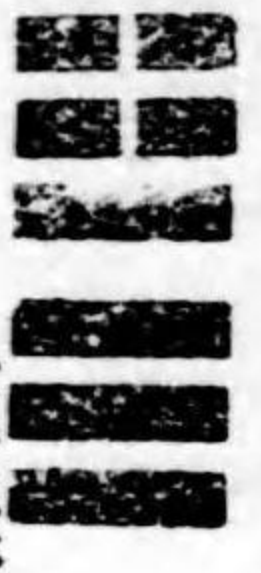
○動中の靜、一部分の改革、居に安んじ位に止まる、胚胎、會計、太平を致す、同物相攻む、動搖する、守つて失はず、今得ずして後に得る、雨降つて地堅まる、損して得これ、我順彼勇、彼は我に求めぬ、我は彼に求めぬ、騰部獻立、山車、益裁、囊中錢あり、



天山遯

(危邦入らず亂邦居らず)

○危を避ける、洩れる、引く、定らぬ、漸く衰へる、君子去る、決斷を貴ぶ、時を失ひ災を免れる、動くに利あり、止まるは利あらず、早く自決せずんば禍立どころに至る、陰暗の力を増し光明やがて小なり、彼は嚴我は頑、暗溝、トンチル、水門、非常口、



雷天大壯

(さかり、勢に乗て過つ)

○富且貴、進んで所まる止を知らぬ、威力、旺盛光華、物を載せる、挖目にすべし、明に失す、明瞭、幸慶あり、物に物を重ねる、陥る所あり、外に開けて内に收む、手堅い家風ぢや、活動を止めぬ、顯榮、上る、坊主に鉢巻、閻魔大王、帝王、舞樂鐘鼓、爆竹、



火地晉

(光明闇を照らす、進歩)

○明らかな、賜ふ、光彩、貞止、外より來り助く、智あまり有りて才足らず、有餘を以て不足を補ふ、出現、來臨、秀拔、安樂、仁愛、名譽、往來、根氣強い、目上の人に相談するは利なり、一料簡は不成功、徐歩、藥玉、燈臺、イルミ子ーシヨソ、高張提燈、



地火明夷

(深く自ら晦まして吉)

○暗い、陥る、晦ます、亂れる、我一人明かなりとも衆の暗きを奈可せん、落第す、失意、退讓又退讓、拙劣、足下ばかり明い、暫し待て夜も明けう、長病、失明、功に賞無く、逆に罰あり、暗黒時代は至れり、地に木實無し、燐寸、不知火、昔の行燈、自動車、



風火家人

(したしむ、内を整へる)

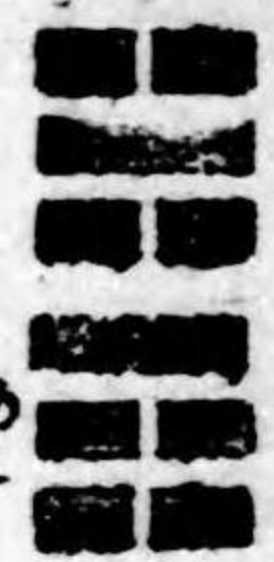
○内れる、包む、安樂、共同、共和制、貿易、交附、交代、理想、争はぬ、忍辱、溫柔、熱談、懇ろ、光明、悦服する、高潔、貞正、後才常識に富む、心痛あり、心に悪謀を藏す、巧妙なる政略、我明かに他顧ふ、電燈、玉手箱、博覽會、綿繡、時計、兵器、



火澤睽

(形異而用相待、事志と違ふ)

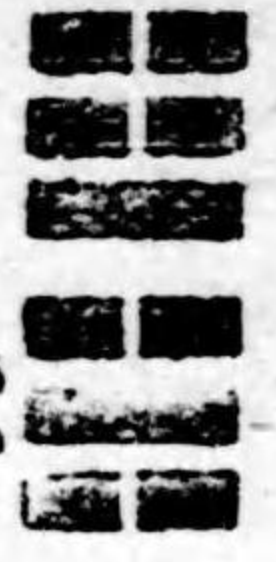
○そむく、違ふ、亂る、助ける、反目、倒れる、破裂する、長を採り短を補ふ、我説けども彼明察にして従はぬ、時事日に非、軋轢、異形、生きず死なず、成る成らぬの間、顯はれぬ、起きあがる、異性相授く、包圍、口笛、つゝれの錦、金魚鉢、雉と鷲、



水山蹇

(なやむ、辛勞の後に樂)

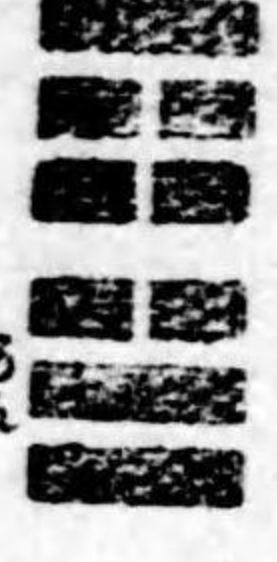
○足なへ、蹙まる、前路險惡にして後ろ亦絶壁の山、進退谷まる、人の心が頼まれぬ、困難に堪へぬ、陰險手段、我は魯鈍他は奸黠、破敗散財、不健康、不信用、迫害せらる、陰で罵る、隠伏、艱難汝を玉にす、忍耐、山中の流、瀑布、門の上に薔薇の花、炊烟、



雷水解

(舟車遠に致す、進軍)

○進め奮へ歌へ、足本を氣つけよ、恨を解いて和を結ぶ、我道漸く行はれんとする、苦勞あり能く堪ふる者は成業近き將來にあり、橋渡し、損失を取戻すのみ未だ利あらず、我は權謀を用ゐる彼は輕鈍なり、貞正なるを要す一時の權略に由るな、船、車、自轉車、



山澤損

(己を損し池を益す)

○損せよ散らせよ傾けて救へ汝の術は世の寶なり、我は説き彼は容れる、下に取りて上を養ふ、與ふるは取らんが爲め、盜に飯を食はす如し、建設的破壊、退きて守る、此方より向の方が勇んで爲す、左を擧げて右を措く、前高く後凹む、假山泉水、歡迎會、納税、



風雷益

(我を益す、得意時代)

○富強策、名譽、共同、光彩、殖産、工業、收入、上達、卒業、利益、心痛を益す、嫉妬心、上より助けられる、彼我ともに益する、進んで説け、説客來りて我を説く、増加する、添へる、實入、重荷に小附、左團扇、輕氣球の飛揚、空砲を發つ、法螺を吹く (俗語の)



澤天夬

(斷行果決、騎虎の勢)

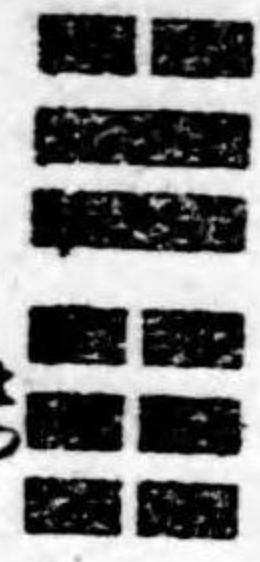
○貪る、決定する、彼は背く、我は許さぬ、急激、亂行、中庸を過ぎる、釣が取れぬ、偏僻、飽くことを知らぬ、目的外に逸出する、百發して百中、直言直情、直線的に、日西へ斜め、我賢彼不肖、上逸下勞、過失、高山の巔に噴火口の跡、懸河の辯、恐喝、



天風姤

(期せずして逢ふ、意外)

○治極まりて亂生ず、女に就きて痛恨、陰氣長せんとす陽氣日に消す、遠き慮無ければ必ず近き憂あり、損失、意外なる吉事、隠す、失ふ、あやまつ、女強く男弱し、案外なる災禍、智に慢するな徳に由れ、大奸似忠、玉に穿つ、大堤の蟻穴、散初めた櫻の花、



澤地萃

(あつまり、取締まる)

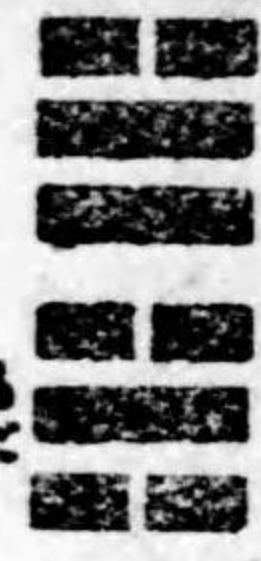
○祭る、出合ふ、藏する、取引する、延引になる、引付けられる、愛せられる、賑やかな、出世する、觀察、出づる、顯れる、清潔、約束、彼は洒々落落々我は温厚の君子、力を共に合せて事を成す、材料を集める、小猫、祭場、演説會、踊場、音樂堂、金盃



地風升

(實登る、進む、昇る)

○この卦は力を致して結果を樂しむのである、徳を積んで福を致す、種子をまく、勢力をつける、揚る、發達する、見つける、往來する、買ふ、與へられる、活動、培養、車を驅る、秘笈、橋渡しをする、増加する、往く者は小、來るものは大、大旗、木馬の荷、



澤水困

(困しむ、缺ける、危む)

○求めて得ず、求めざるに難至る、我困しむを人は冷然として傍観する、困難に恵む、氣が曲んで人を疑ふ、安きを想うて怠る、人を羨む、世と相背く、險を行きて伴を求め、忍んで難に堪へる、天を怨み人を尤む、貞正堅實ならば吉、悲憤慷慨、擊筑悲歌、



水風井

(刑罰、辛苦、轉變)

○居に安んぜず、我れ動搖し他は困難す、時を得ずして穴ごもり、益々あしくなる、失脱、來べきもの至らず、來るべからざるもの至る、他出する、水門、城門、水道鐵管、杯中の美酒我媚びても彼れ乗らず、陰險、井、拘留、水垢離、硯、徳川家康、埋木、



澤火革

(改革、革命、煉鍛する)

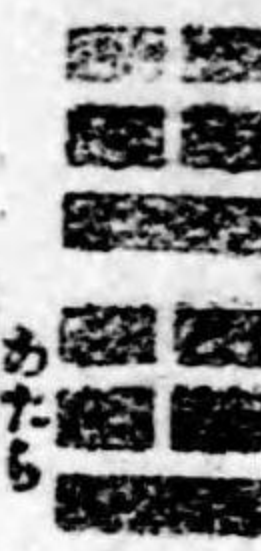
○我れ彼れに代つて柄を乗る、我は明彼は才子肌、貿易、交代、交互、人力を更へて業を成す、將來の希ひ、理想的人物、和熟、討論する、終結、仕事を變へる、方法を新にして、革命を發する (Revolution. 革命) 湯、蒸殺する、温育、暖養、罰する、進化、



火風鼎

(新にしたり、定める)

○五味を調熟する、飲食の徒、動かすべからず、法を制る、彼は智我は頓才、胸中の鬱屈を伸べる、文物煥然たり、危きに臨んで懼れぬ、英才利器、積善、事すでに確定して今更妄りに變ずべからず、權臣専らにする、公園、紀念碑、西洋電、瓦知燈、玻璃瓶、



震爲雷

(健活、虚勢を張る)

○新しい、勢つよし、猛々しき、春の如く物の生茂に向ふ、鳴渡る、戦ふ、競ふ、前に後に物さわがしい、我追ひ彼逃げる、狂亂する、輕舉、周章く、事定まらぬ、蘇生、回復する、権力、権利の主張、長く驅て進む、蒸籠、高利貸、質屋、大工、二階、重箱、



艮爲山

(止まる、終つて始まる)

○門前に車轡の止まる氣色あり、高い、動搖せぬ、固滞して變通すること無し、才畧が無い、桎梏、悟らぬ、頑狂、泰然自若、困却、手堅い一方、時勢に後れぬ、門を守る、非常をいましめる、窮屈な、油断せぬ、融通の利かぬ、樓門、高塔、樓閣、龜、高足駄、



風山漸

(秩序的進歩、進止法度)

○漸進、急がぬ、阻勉な、小を積んで大を成す、百年の長計、目前の小利に非ず、人の手本となる、顯はれる、漸く上る、彼れ説き來るも我れ拒んで容れぬ、遠大なる、人のために劬勞する、吉慶あり、積善の餘慶、犬の門番、誰何する番兵、捧銃の禮、楊柳、



雷澤歸妹

(二たび定まつて破れる)

○事前に定まりて後に變ずるは事前に視る所疎略なれば也、始を戒めよ、嫁の出戻、倒施逆行、喰違ふ、變約渝盟、信義を守らぬ、我之に就けども人之を信用せず、光明を見ぬ、當て事が外れる、人の恨を身に引受る、入江の岸に繋り舟、蘆荻おひ茂る、漑笛、



雷火豊

(光大盛榮、日天に中す)

○饒富、資本充實にして事業進盛、大漁あり、我は明に彼は勇なり、彼は求めず我は従はず、上る、進む、日の出、名譽、利益を獨占する、太平の世、家業隆盛なるに誇りて奢侈に流る、餘る、光彩うるはしい、上騰、花籠、美麗なる手藝品、美術館、大集會、



火山旅

(居定まらず、歡樂極りて憂患)

○旅にもく、旅に次る人の如く腰かけ仕事なり、動きて止まらず、浮か々々と、人賢にして我に教へて呉れる、日西山に傾くの衰勢なり、胸中冷却石の如し、小忍を忍ぶ能はずして大謀を過つ、人と和する能はず、夕焼雲、虹の橋、城の櫓、火の見、菊花、



巽爲風

(順從、事を重ね行ふ)

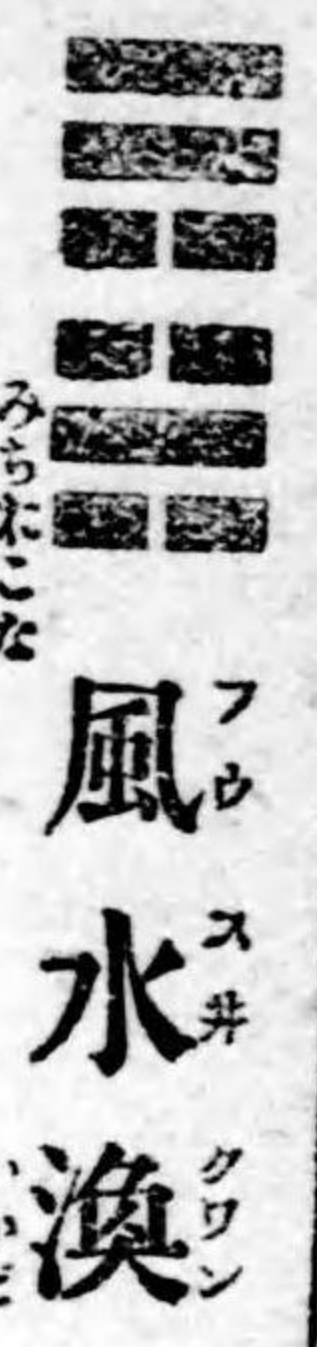
○何事にも根氣強く行ふがよい、匪勉に失敗無し、目前の小利にあらず、人の手本となる、顯れる、漸く上る、彼れ説き來るも我れ拒んで入れぬ、遠大ぢや、大風呂敷ぢや、人の爲めに致されるのぢや、進退定まらぬ、雨掛、靴、類廣き人、白哲人、禿頭、椅子、



兌爲澤

(よろこぶ、解脱する)

○説く、喜ぶ、歌ふ、叫ぶ、喋べる、缺ける、散らばふ、助を呼ぶ、順正にして吉、寶の山に入りながら手を空しうする、借財、遊惰にして、演説する、不満足、貞實に乏しい、顯れぬ、來ぬ、取れぬ、定まらぬ、往かぬ、梵唄、討議、談判、酒宴、論解、遁辭、



風水渙

(散る、散らす、去る)

○道行はれずんば槎に乗て海に浮ばん、一葉の小舟に掉して大海に泛ぶ、事破るゝも落膽せぬ、口さきばかりで實が無い、不如意なることばかり、遠く避けてゆく、内に外に憂多し、内に屈し外に伸ぶ、分別あり、才略あり、遊覧船、波浪、大魚游泳す、煙草のむ、



水澤節

(貞節、嚴肅、順良)

○しまりくゝり有り、節操、濫費、勵行、輕進せず、能く考へる、節儉、發行餘力、奥床しい、我れ説けども他は耳にも入れぬ、馬の耳に風、蛙の面に水、事に臨んで善く謀る、男女位を正しうす、餘あるを蓄へて用を待つ、挿花、金玉糖、アイスクリニウム、



風澤中孚

(中に誠あり、和協)

○我より求むるに彼悦びて應ずる、彼の求をば容れる、圓滿に、發展する、豫知す、中道を行く、口論する、睥睨する、廻轉す、活動す、相論する、相争うて決せず、互ひに反目して和せぬ、争うて後に和協成る、圓轉滑脱、合せ鏡、水鏡、合掌、接吻、呼應す、



雷山小過

(小しき過ち、反向)

○動き過ぎて倒る、彼も我も背向ける、少々遣り過ぎた、包む、活動の中に苦辛あり、強求に苦しむ、態度頗る曖昧にして、不偏不黨、罪惡を長ずる、恨み、違背、仇讎、無定見、和義を斥けて主戦論を唱ふ、飛行す、風車、栗のいが、火屋の掃除器



水火既濟

(わたる、成就する)

○卒業する、受取る、終る、遂げる、定まる、成る、走る、治まる、治極まつて亂生する、治にのて亂を忘れな、下明かに上暗きを奈何にせん、始は吉、油斷大敵、これから亂れる、元に治める、出入する、我あまりに熱し彼あまりに冷やかなり、松に月、碁盤、



火水未濟

(未成、定まらぬ)

○まだ濟まぬ、光うすし、辛苦あり、不安心なり、終りて又始まる、我は難み彼は治まる、始は正しく後は非む、向上する、自暴自棄、艱難汝を玉にする、苦の後に樂、

▲此未濟の卦は上九爻から最初 乾初九爻に移り六十四卦三百八十四爻 轉無究ちや、

○六十四卦の大要を説いたので諸君は將來占に臨んで、殺活自在、運用靈妙なる秘機を捕へるに至らば漸々深く大いに理會せらるゝで有らう、申さば言ひ盡されねども一言以て之を蔽めば『易は一陰一陽一進一退の消長去來の錯り行はるゝもの』に過ぎない。故に實を明かせば易に定まつた吉定まつた凶といふ卦爻は無く、時と事と處と仕方とによりて吉とも凶ともなるものである。但し大體に於ては規則立てぬと判断の目安が起きぬゆる、聖人それで定められ、後世研究に研究を重ねたものが右の六十四卦の大意であるのだから深う御翫味して下さい。

どれ、いよく正念場ぢや！

○ 占式二則

○ 運勢の占 から教へませう

(い) 運勢は得たる本卦を以て其歳の吉凶の大要とする、前の六十四卦大意につきて先づ積極的消極的(進歩的退歩的)を考へ定めて所謂吉い歳か凶い歳かを占へば其れで可也。

(ろ) 次に卦の體用を本卦で分ける、本歳の十二支の性に對し體の旺相死囚休を見て本歳の其人の身體に於ける健

弱を察す、

次に用の旺相死囚休を見て本歳の其人の事業行為に於ける吉凶利損を占ふ、

(は) 更に細かく月々の吉凶を察するに『配月法』といふものを行ふ其法は下の如し、

○ 動爻を反して變卦を作り之を一月とする、變爻の次を反して變卦を作り之を二月とする、其變爻の次を反して變卦を作り之を三月とする、次を次を動かして上から初に移り又二三四五爻と順々に動かして十二月目には本卦と同じ卦に見るのである、

さて配月法は其月々の「體卦之主爻」と其「月之性」
 とを對照して身體的吉凶を察します、其月々の「用卦
 之主爻」と其「月之性」を對照して事務的吉凶を察
 しますが、此で申す主爻は彼の變格の式によるものと
 御心得なさい。

○ 五運圖式

| 時氣 | 卦爻 | 旺 | 相 | 死 | 囚 | 休 |
|----|----|-----|-----|-----|-----|------|
| 二月 | 三月 | 木 | 火 | 土 | 金 | 水 |
| 五月 | 六月 | 火 | 土 | 金 | 水 | 木 |
| | | (吉) | (吉) | (凶) | (凶) | (半凶) |

| | | | | | | |
|----------|-----|---|---|---|---|---|
| 八月 | 九月 | 金 | 水 | 木 | 火 | 土 |
| 十一月 | 十二月 | 水 | 木 | 火 | 土 | 金 |
| 一、四、七、十月 | | 土 | 金 | 水 | 木 | 火 |

○ 體之主爻の五類によりて先づ其の吉凶を受ける人倫
 が誰れであるかを定めるのちや

- ▲ 兄弟爻 自身若しくは同胞又は親友の身、
- ▲ 子孫爻 子孫若しくは目下の家族等の身、
- ▲ 妻財爻 外より入りたる卑屬妻妾又は奴婢等の身、
- ▲ 官鬼爻 畏敬すべき人師匠上官所天親方……等の身、

▲父母爻 尊屬長上即ち父母祖父母の身、
 この體之主爻が時氣（月之性）と旺か死か囚か休か相かといふ
 關係を見て下の様に占ふ。

▲旺は大吉……盛……たとへば死も生き病人も起ちあがり災も免れる類ひぢや、

▲相は吉……進……たとへば盲も明かに損も利し難も安くなるの類ひぢや、

▲休は半吉半凶……疲……たとへば心憂あり難義あり缺損ありとする類ひぢや、

▲囚は凶……苦……たとへば刑せられ獄に就き神咎あり

又は精神に苦痛の類ひ、

▲死は大凶……亡……たとへば病は死し利も損となり大なる禍害あるの類ひぢや、

右の如く體之主爻の旺囚を察するに當り猶見のがすべからざる一大事あり其れは『用之主爻』と見合せる一法を云ふものである、其の法は用主と體主との生剋和を見るのぢや、

◎體主爻と用主爻と比和の時は凶至て少なく、吉至て多い、

◎體主爻が用主爻から生ぜられるときは吉は重く、凶は至て軽い、

◎ 體主爻が用主爻を生ずるときは吉少なくして凶は凶たり、

◎ 體主爻が用主爻から剋せられるときは凶多く、吉は少し、

◎ 體主爻が用主爻を剋するときには吉少なく凶は凶たり。この故に身體的の大吉を占判するのは體用主爻が比和する場合は若しくは體主が用主から生ぜられる場合に外ならず、他は重く斷ずるに及ばぬものぢや、又身體的の大吉を占判するのは體主が用主から剋せられる場合は若しくは體主が用主を剋する場合か（或は往々には用主を生ずる場合にも）

に限るのぢや、他の場合は『三官』が體主爻にあると吉凶重し、又この體主爻空亡するときは吉凶を占はず。

○ 用之主爻の五類によりて先づ其の吉凶あることが何種の事件なるかを察するのぢや

- ▲ 兄弟爻 共同、公共、争訟、破産、虚偽、悪客、良友、賣買、交換、周旋、運動、信誠、親切、朋友兄弟等の事、
- ▲ 子孫爻 好客、善友、物を捉へる、福利、殖産、失費、保證、不名譽、新しき事、饗應、子孫身屬のこと等、
- ▲ 妻財爻 衣祿、紛を解く力、錢財、俸給、婦徳を得る、
- ▲ 婦女の難、女の事の利害、投機事業、財産に就きての吉

凶、博奕、利慾、

▲官鬼爻、奉公、官事、公役、軍役、褒賞、名譽、官禍、

天災や事變に就ての損得、盜難、立身出世のこと等、

▲父母爻、印形、文書、勳章、證券、證據物、官舎、家屋、

音信、愛助、依頼、助勢、世話、迷惑、父母尊屬に關す

ること等、

◎旺するは大吉、前に示した五類の所屬にて吉的判斷をす

るが宜しい、

◎相するは吉、前に示した五類の所屬にて吉的判斷をなす、

◎死するは大凶、前に示したる各五類の所屬にて凶斷をな

すべし、

◎囚するは凶、前に示したる五類の所屬にて多少の凶斷を

すること、

◎休するは半凶、前に示したる五類の所屬にて少しく穩か

ならぬ判斷をなすべし、

但し體主爻と是の用主爻との生剋和を見よ、體より剋

せらるゝ大凶、體を剋する凶、(體を生ずる半凶とする

こと有り) 又體主用主が比和する大吉、體から生せら

るゝは吉とする。

◎體の側から見ると用の側から見るとは各反對の結果と

なることゝ知れ。
猶ほ用主爻に『三官』がつくと吉凶ともに重く又用主爻空亡すれば吉凶を占はず。

○ 試 題

○ 諸君は従前くはしく教示したる占式によりて今や『運勢』の年家月家だけは立派に占考することが出来るやうに成られました、由りて其の形式を奉じて一意熱心に御熟達あらんことを祈る。

(一) 卜時は丙午年二月己巳日「天火同人」の九三を得たが被

占者の運勢を問ふ。

但し五十歳の男子、月家占を要せず。

(二) 卜時は子年七月壬辰日、七十歳女の運勢に「坤爲地」上六を得た、吉凶いかに。

但し甚しき吉凶あるときは其の月だけを指定せられよ。

(三) 三十八歳の男子あり未年十月甲戌日に占はせて「中孚」

初九を得て其月に始まつて翌年九月に至るの月家吉凶を問ふ、諸ふ一々明確に判断ありたし。

幾歲抱狂骨 孤筇養我真 釣魚謳帝力
 羨茗喜來賓 六甲風雷夢 長生一諾人
 工夫存易簡 莫與史書親 次韻言志(杖)

○ 訴訟の占

○ 今度は訴訟の占式を示さう。

吾門では訴訟を別けて行政、刑事、民事の三式に致してあるが此の便筮では只刑事と民事との二種につき最も確かな最も捷く手数のかからぬ式を取りて來ませう。

○ 第一には『刑事』である、

い) 正格的用之主爻を原告とする、
 (ろ) 正格的體之主爻を被告とする、若しくは被告辯護士とする、

(は) 動爻變爻ともに之を裁判官とする、

た) 是の三日のみ、刑事訴訟の罪無罪を占ふには是の三日の生剋和を鑑れば其れで済むのちや、先づ用主體主の關係から覗へ。

△ 用主體主の關係は即て檢事對被告の關係、それから用主動爻(並びに變爻)の關係を覗へばよい、

△用主動爻の關係は即て検事判事の關係、
 それから又體主動爻（並びに變爻）の關係を覗へはよい、
 △體主動爻の關係は即て被告判事の關係、
 斯様なものである猶ほ後に示す所の圖式に照らして見られ
 よ一目瞭然所謂掌上に運らさんのみ、何と妙法であらう。

○民事の占式を説かう

- (い) 正格的用之主爻を原告とする、
- (ろ) 正格的體之主爻を被告とする、
- (は) 動爻（變爻も勿論）を裁判官とする、

民事も矢張この三目の生剋和をしらべて見れば直勝敗が知
 れるのぢや、左に刑事民事兩式に必要な體主用主動爻の
 關係表を作つて置くもゑ一々其れに據ると苦勞は無ない。
 尤も本卦は前にして變卦は後（變卦が大切ぢや）

刑事關係表

○用體關係

| | |
|----------|----------------|
| 用體 和比 | 検事追求せず、被告に利あり、 |
| 用生體 | 検事追求せず、無罪を認める、 |

| | |
|----------------------|-------------------|
| 體生用 | 被告側が検事の論告に反する能はず、 |
| 用剋體 | 検事大に被告側を壓迫論破する、 |
| 體剋用 | 被告側より大に検事を論破する、 |
| ○用動關係 | |
| 用動 <small>和比</small> | 検事と判事と意見を同じうする、 |
| 用生動 | 検事が判事の判決に賛同する、 |
| 動生用 | 判事専ら検事の論告に耳を傾ける、 |

| | |
|----------------------|------------------|
| 用剋動 | 検事が判決に不服——検事の控訴、 |
| 動剋用 | 判決が確として動かされぬ、 |
| ○動體關係 | |
| 動體 <small>和比</small> | 判事が被告側に近づく、 |
| 動生體 | 判事が被告に同情を表す、 |
| 體生動 | 被告は判決に待つのみ百計無効、 |
| 動剋體 | 判事が被告の説に耳を貸さず、 |

體剋動

被告側が能く判事を動かす、

事民關係表

○用體關係

用體

和比

原告被告和するがよい、和する餘地がある

用生體

原告不利、即ち被告の利、

體生用

被告不利、即ち原告の勝、

用剋體

原告の行く所前に敵無し、被告敗、

體剋用

被告の論陣堅固にして原告危し、

○用動關係

用動

和比

判事と原告と相近づく、被告不利、

用生動

原告の主張或部分は貫く能はず、

動生用

原告の勝利、

用剋動

原告側の不服、控訴することあり、

動剋用

原告の請求成り立たぬ、

○ 體動關係

體動

和比

被告の旗色よし、

體生動

被告や、面白からぬ、

動生體

被告大勝利、

體剋動

被告の不服、 控訴するこゝあり、

動剋體

被告大敗の兆、

○ 試 題

- (一) 刑事訴訟に「乾爲天」九二を得たり被告の安否いかに、
- (二) 同「澤山咸」上六を得たり判事や検事や又被告の辯護士の始終を問ふ、
- (三) 民事訴訟に「睽」六三を得たり原告側の成行を占はれた
- (四) 同「渙」九五を得たり被告側の主張貫かるゝか貫かれぬか、

◎ 第貳卷より婚姻、失物、待人、商賣、走人、會見、談判、受驗、出行、病氣、金策其他の占式は順次に開示致さう、彼の物價占、鐵山占等の如きは中本筮に進んで最も新しき最も合理的なる最も精密なるものを教へたいと思ひます。

○ 質問規定 (易學顧問にも通用す)

(い) 質問の内容は本書を以て教へたる事件の其の分量に限り著者拙文なるが爲めに記事の要領を得ざるやうに思はるゝもの。

(ろ) 普通の讀書力を有する人にして再三の精讀及び數次の考量を経られても猶ほ記事の要領を得られざる者と認めたる場合)

右二者へは懇篤に答へますが是の限定以上には遺憾ながら著者は答書を呈しませぬ。從來多數の經驗に由り著者は世に驚くべき蟲のいい人、驚くべき不精者が少なからざるのに苦しめられ悲しまされてるからです。

似鐵杖

原 麟堂 正

共是沈淪零落人

悲觀爲性鬱過身

如今止語功名事

酬麟堂

越砥磨來欲活人

明時奚用山林隱

暫絶人間欲養真

内山鐵杖

欺霜莫邪奈君身

金馬門也足養真

◎易學門

(本卷のは中等教育の易論なり
次巻より通俗の講義を掲げん)

河洛一家言

△支那古代南北兩思潮——孔子と易と——

○ききよく 枳棘は鸞鳳の巢にあらず吞舟の魚は潺湲たる細谷川
に游息せざることを知らば、孰か其れ絶大なる思索の必ず
絶大なる人格に頼り而して絶大なる人格を養成するもの實
に絶大なる天地なるべきを疑はん哉。

始く彈丸黒子の小島を去て夫の大大陸に思を馳せよ、宇内の巨鎮「ヒマラヤ」の絶巔には劫初不滅の雪の光もの凄くも神祕を語らんづと其の南天をば遮り、葱嶺阿爾泰は西又北を扼す、たゞ東方一帯を則ち渺茫垠も知られぬ太平洋に臨み域中亦天山崑崙の兩山脈を以て不落天府の雄形を備へ、さては黄河楊子江の二水源を中央亞細亞の高原に發し中ごる百川を吸うて大を加へ汎々滾々焉東瀛に朝宗するあり境土の廣、民衆の大、氣候の變、物産の饒、風俗の殊、若き絶大豊美なる畛域を求めて寰宇列國たゞ我が靖蜒州と一衣帶の水路を間つる西鄰支那を措かば何處にかある。支那乎

支那乎、天然に此の來龍あり胡ぞ徂徠人文發達の上に在て幾多の響應無かる可けん。

○およそ支那の住民には今や漢、滿、土耳其、西藏、交趾支那の諸族ありと雖も猶ほ古代に於て支那文明の英華を煥發したりし者は實に所謂三代の聖賢どもにして其れらは主として黄河以北の境に滋殖しける漢族に屬し東洋史上重要なる人種にして實に彼土の文明史に多くの頁を與ふるものなりき。而して翻つて此際他の交趾支那族の如きを見るに彼等は多く楊子江の南北吳楚一帶の地を卜して靜に息棲せしに止まり猶未だ社會上に哲學上に著しき思索運動の

會に際せざりしかば久しき間北方漢族よりして全然之を蠻民視せられ且自らも敢て所謂華夏と對抗せんとも爲さでありし也、史記の楚の世家に楚の先たる熊渠が「我ハ蠻夷ナリ中國ノ號諡ニ與ラズ」と云ひしとか記されたるを見ても知らるべく蓋し人種及び地理の殊別は彼土上下四千歳を通じて幾ど截然たる鴻溝を畫したるが殊に周代に在りては明かに相反せるの色相を見たり、南方の民は天恵に維れ甘んじて遊惰安逸の夢暖かに所謂「寛柔以テ教ヘ無道ニ報イザル」の溫柔優與なるに引替へて「金革ヲ狂ニシ死ヌトモ厭ハザル」底の勁健なる風氣を養成せりしもの實に北方民族の特

色とせし所なりしは争ふ可からず。

○夫れ暖和の地方は天與の産物饒豊にして氣化の平も亦自ら人身に適するが故に食餌の如きは多く穀菜の類凡そ淡味なるものを常用するを習となし衣食此に足らざることを愬へざるからに不識不知の間に安逸無爲に流るゝものあるは古今を問はず外内を論せず的歴として予輩の爾か認むる所なり。之に反して朔北冱寒の處か又は左までに不毛の地ならずとも山河の形勢自然に陰冷濕沮にして土宜豊かならず時化氣變も亦甚う健康に利しからざる方面に住める民人は勢ひ人力を起し以て天恵の贍らざる所を補はざるを得

す、而も其の飲食とするものや何、見よ多くは濃厚滋脂の肉類酒菓を用ゐるの必要あることを。

○今それ濃厚滋脂の食物は身體の血液を増進し興奮せしむ其勢ひ安座冷情に就く能はずして勞働の方面に立向ふの傾あるを免れず是を以て頭腦冷靜寂焉として幽冥の故に通ずる底の思索に耽らんことの難かるものを況んや復た生存競争の漸く激烈を加ふるの時代に進みいたるをや之を奚若ぞ北方漢族が夙くも社會上の事題に著目し同時に何事につけても實際的を旨となしけるこそ地理上より生理的心理的に及べる影響として當然必至の數なんなれ。知らずや北

方之強は如上の因由にて政教文學すべて八九分實際的思潮の漸を以て而して明晰なる體系を構成し竟に孔子に及んで周代思想界の大立者たるに至れり、且つや此時に方りては南方之強も亦徒らに惰眠を貪るの蠻民に非ず就中其の大自然覺せる者にしては上代黃帝の頃より隱約の間に流傳せりし暗潮に浪を揚げて驀然雷發したり此を老聃の道德主義となす。

○さても北方南方人文發展の拮抗こそ此時より起りたれ而も之が各代表者として立ちけんものは言ふまでも無く孔子老子の二大聖人なり、一は實際的なり世間教なり國

家至上主義なり嚴重なる階級制度を尙ぶものなり他は之と
 事かはりて談理的なり出世間教なり箇人主義なり上下貴賤
 賢愚の無差別を呼はるもの也、かく凡ての方面に於て斯二
 家が兩々相當るの光景よ縱令史筆に的確たらざるも今に及
 んで猶ほ當時を想描するに難しと謂はん哉。かくて後世孔
 氏の學は孟軻に傳はりて更に一段の活氣を呈し歐云として
 風動する處列國の君臣を論殺したりき又老氏の説は莊周之
 を張皇し恍洋自恣熾んに一世を罵倒せるの概ありしが南方
 家の高談玄語蕩々乎蒼生を翻弄これ快となし一指佗の云爲
 を容るゝの雅量無かりけるに反し流石に適無く莫無く彬々

然と集大成せりし孔子は此際管に異學南方の虛無恬澹たる
 出世間のそれを度外に附せざるのみならず更に進みて此が
 研鑽のために精力を盡されしに似たり曰く『異端ヲ攻ムル
 (責)ハ害アルノミ』(論語)知る可し彼れが他山之石以て自家
 の美玉を攻きたるに怠無かりけんを、又史記の作者の説に
 據れば彼れは周に如きて禮を老子に問ふと云へり當時の所
 云『禮』なるものが何たるをだに知る人は偕はと點頭かる
 るなる可し、假令孔子の従事したる老子と道德經の老子と
 全く別箇人物なりとの説を是として置かんも而も尙且つ論
 語に云はずや『夫子焉ンゾ學ビタマハザランヤ而モ又何ノ

常師カ之有ラン』と是故に苟も道の存する處東奔西命南楫北較未曾て勞を辭せず以て窮めざれば已まざるの向上勇氣の旺盛なりし彼孔子は郊子や萇弘や師襄の屬に至るまでも之に就きて藝術を叩き而して遺すこと無からんを期せしを想へ、彼の語を聴け『吾れ少ウシテ卑シカリキ故ニ鄙事ニ多能ナリ』といへども於戲彼れや何ぞ惟だ鄙事にのみ多能なるに止まる者なる乎、疑問にあらざらん耶。一日彼れは其が門弟子どもの席にて二三子何ぞ汝らが志を語りざると問はれし時、子路冉求らの答こそ弱氣勃々たるものなりけめ獨り曾皙最後に對へけらく『若草萌ゆる彌生の空、春服

の袖ふくよかに童たち二人三人召連れて、山や紫に水は清う流るゝ沂にも浴し舞雩の臺にしも風詠せばや』子節を打て嘆す、我は點也に與みせんづと。

○實にや萬づ實際的を貴べりける當時北方の學問思辨よ現在社會に直接利害の關係を有せざるものをば極力擯排せしは無理からぬことと謂ふべし、但だ此間卓然獨り群物に抜きたる孔子に在ては南方形而上理學の骨髓を得て其の誕を去り其眞に徹し一たび天人の際を貫くの大悟了を経、還つて世間の事物其の兩端を叩いて而も其の中を民に用ひしむるの美を致したるの經歷由緒を討原一番し來らんこと

を要す。嗚呼春風浴沂の逍遙游を神會せる孔子は又檢束自勵動止つねに規矩準繩に合つて箸の上し下げにだにも小六つかしき郷黨篇の孔子なりけり、或時は泰山の麓を過つて「記セヨ小子、苛政ハ虎ヨリモ畏ルベシ」と教へつ而して「如シ我ヲ用キル者アラバ東周ヲ爲ンカ」と叫んで施設を當世に急ぎし彼れは怪しからずや「來レ顔回、槎ニ乗テ東海へ遁レシ」とマツを捏ねし人ならんとは、兇賊にひとしき敵國の惡計として女樂を以て魯に歸れば彼れ其の大抱負を行つて著々成功將に周政たらんとするの位と時と處とを擧げて之を棄て去ること箇の弊屣に似たりしものは誠に禮

の嚴に道の苟くも曲ぐべからざるを默示したるに非ずや而も彼は後日衛の南子といふ妬婦に見て成す處あらんとせしは如何ぞや潔癖にして短慮師に事ふる親を思ふ如き季路子が夫子に疑ふ所ありしも一應は理無からんや曰く「言ニ納ニシテ行ニ敏ナシ」又曰ふ「敢テ佞スルニ非ズ固チ惡メバ也」人の來訪を斷るに病を以てし其の去らんとするや瑟を弾く寔に意必固我無き彼の處置ならんやは、之を要するに解し易く見えて而も端倪すべからざる彼孔子をば愚に似て賢、聖にして凡なる、凡聖悉備の偉大なる人格教理を眼ひ以て彼れが形而上形而下の大自然の奈何並びに其の流

石北方^が的^の思潮^に免^れずして正^に時代^の見^{には}洩^れざるが
まゝに猶^ほ理實^を彬々^を期待^しけん彼^れの凡^てを色續^達體^す
ると共に健孚^感應[、]天人^不二^{なる}酬酢^に悟徹^せまく欲^{せば}
我等^は安^{くに}之^{いて}得^んものぞ。

○これ有^るかな是^れ有^る哉^{一部}「周易」は久^{しく}我等^を
待^つ矣[、]予^は支那^哲學^の淵泉^{として、}道德^の神髓^{として、}
經世^の樞機^{として、}又符契^{文字}の祖先^{として}更^に亦精妙^の
義理^を推演^し自在^の法象^を開合^{して}卜筮^豫言^の靈用^{を作}す
の大道[、]這箇^八極^之至教[、]雲泉^之秘錄^{たる}ことを認め敢^て
江湖^有道^の座前^に是^の經典^を薦^むる者^{なり}
（前篇了）

△易の起原—易書作家に對する異論—

○易の起原につきて其の八卦を畫したるものを伏犧氏
とするは衆口一致せり、而るに重卦即ち六十四卦の構成に
在りて亂訟紛若魏の王弼等は之を伏犧と爲し漢の鄭玄等は
之を神農氏と爲し晉の孫盛は之を夏禹と爲し漢の司馬遷は
之を周文と爲すが如し、予は姑く王說に従はん。蓋し以ふ
に伏犧の世未だ文字の道發達せず重卦の如きも圖書を以て
之を傳ふるのみ後代有る解説的^{文字}を用てせしものには非
ざりき、三皇五帝夏后氏を歴て皆亦この易を用ゐて經世の

名訓となしけるが般人に迫んで其の尙怪崇鬼の俗をなすこと最甚しく褻慢迂怪の士ありて衆愚の好尚に投じ過度に占卜の靈妙を誇張し反つて道の眞面目を傷つくるの患まことに忌々しきものあり。

○是に於て西伯姬昌（周文王）伏犧の卦畫に原づいて六十四卦の綱領を統論し其子周公旦之に繼ぎて其の每卦六畫三百八十四爻に推演的釋文を命じぬ、後の學者前のを「家」後のを「爻」と稱し其の互に相待ちて復た大易の本義實體を明かさるゝものとせり。誠に其の蒼勁なる文字簡古なる章句は亦頗る卓勵風發の氣象に富みたるを後世春秋の比孔

子出で、更に之を張皇し、繫辭傳、文言傳等所謂十翼を作り添へたるが其が文章の妙機に觸るゝ所精明博大なる義理を見る中にも繫辭傳第五章及び第八章に於て道の本原を究め易の流行を説き一源萬委、萬有歸一、宇宙の外に超脱して宇宙を觀す宇宙の内に範圍して宇宙を論ひ一元これ二方、二方以上に所謂造物主の實在すべくもあらぬことを説明したる處實に千古の快腕向ふ所前に敵無く金鐵不敗の軍を行るが如き觀たり、而して當時北方民族が思想の雄渾なる流石に自ら辭句の間に的歴たると同時に幾何か南方思潮に浴したる氣色の彼此れと仄めかさるゝも鮮少なりとせず、周

代の相異に氷炭互に容るゝこと能はざるかの觀ありし南方
北方兩思想は知らずや吾が『太易』に於て渾然融合些の痕
を印せざるものを。

○孔子は所謂聖之聖ならんも時猶は遠く二千五百歳の
古へにあり兒童日を論争するだにも之が爲に解決を與ふる
能はざりし没推理漢を以て十翼の卓説は多く甚だ孔子の思
想として過ぎたる無きかに疑あり、とは今日考證萬能主義
の人々によりて駁らるゝ所にして十翼悉く後代の託説なる
を唱ふるもの日に滋しと雖も、予を以て之を看る未だ遽か
に首肯し易からざるもの無き能はず、予は其の説の合理不

合理を檢討査駁するを旨となす其の作家が孔子たり佗人た
るをば必しも深く争ふの要を知らざる也、たゞ異を立つる
論客の言には『孔子易を學ばざりけん若し或は學べりとな
すも所謂陰陽説を借て社會の事物に積極的消極的の兩面觀
を與へたる位のこと過ぎざるべく哲理の卜筮のと願ぎた
る跡は無し』又或異論先生宣はく『孔子は性と天道を言
はず高足子貢の屬なほ曾て之に與らず彼は又怪力亂神を語
らざりき論語『我ニ數年ヲ假シ云々』『其徳ヲ恒ニス……子
曰ク占ハザルノミ』斯の二語以外また見る所無き也而も稱
して孔氏の正統を承けしとなす孟子が述作中將た一辭の易

に及べるを見出さざるを如何、乃知んぬ孔子決して易を玩索したる者に之無し』と論じ断々乎十翼の非孔子説を主張すれども殊に知らず議論は此に盡きたりと思ふは大早計、予を以て之を評す論者が讀者眼の淺狹に憾無き能はず、盾は半面のみに非ざるを思へ。

○孝經をさへ偽作と鑑定せらるゝ世に如何はしき傳本例之『家語』の類を引いて予れ豈我田引水を誇らんや、原ぬるに『孔子易を讀むに章編三たびまでも絶たれにけり』とは正しく史記に於て明載せられし所而して一部論語すでに多く孔子の云爲によりて晩年成學の様を窺ふに足る、抑

も孔子が理想郷は那邊に在りし乎其の眼中第一位の崇拜人物は誰れとがする、孔子が崇拜して自身も亦其處に詣るべく渴仰せし人物は堯乎曰く非なり舜乎曰く否、伊尹太公にあらず而も文王にもあらで子なり武王にもあらで弟なり『周公』是也、然り周公且は孔子理想の偉人格にして『周公之事業』こそ孔子が事業の大事業と期したるものなりけめ『郁々乎文ナルカ十吾ハ周ニ從ハシ』甚シ吾ガ衰ヘタルコト吾復タ夢ニ周公ヲ見ザルノ久シクテ』と叫び一には則ち周政二には則ち周禮、實にも周初の文物典章彬々然の盛を致しし面影は今日煥乎たる所謂二十世紀文明に比して多く遜色

を見ざるものありしとは驚くべきにあらずや、孔子此世に
 生れたる時猶ほ周政悉くは破壊に就かず告朔之餼羊ながら
 も幾多の善政美法の存せるを見て彼亦時代兒として左しも
 理想郷を周初成康の際に置きしことは理あることを況して
 孔子亦支那人として多少崇古の癖を有しけるをや。

○かくて孔子が目的は衰周の文物制度を周公の昔に恢
 復し眞箇周政を行ふに至りて止まんもの而して『易』は周
 家の大成せしものにして卜筮も亦『周禮』の尊重奉行せし
 事業也、且つ古の易といふもの數と象とを傳承するに過ぎ
 ざりしを其の周に至りて之が義理を明かしたるは已でに前

にも述べつ之が爲めに卜筮を廢したるには非ずして端的周
 家の爲政に於て頗る鼓吹し獎勵したるの迹亦見る所あるを
 や確たる文献今に於て徵するに足る孰れか燔坑を執て我に
 擬する者ぞ。孔子すでに信じて古を好み盛周の百度を擧げ
 て美なりとす乃ち全力を揮ひて復古の王政を唱ふるに及び
 其の夢にも忘るゝ能はざる人物は周公なり郁々乎と激稱す
 る事業は周禮に止まる然らば則ち周公の貴び周禮の重視せ
 る卜筮を損し斥けたりとは想ひ至らざる所にあらざるか、
 孔子易を讀む孔子卜筮を認む、但だ卜占に熟達せしや否や
 は予の究到せざる所。

○論者物々しく孟子を引きて後楯に頼むに至りては井上梧陰生先一派の見、蓋し忠實なる學究の態度にあらざるを惜む請ふ少しく其の妄を破らんか。惟ふに彼の孟軻子や戰國に在りて獨り仁義を唱道し而して其の學は直ちに孔子に承くと自道す、さり乍ら孔孟を比較し來れ、其の學の深淺其の懐の洪隘其の見地の高卑など決して同日にして語ること難かるに且つや孔門の人物養成を觀よ憤懣せざれば啓發せず其の材に由りて之に授くるありしのみ未必しも師の學を擧げて人皆各之を悉有せしめざりき、政治には冉有や季路や、文學には子游や子夏や、德行には顔淵や閔損や

伯牛や、而して辨才流るゝ如かりし子貢其人さへ與り聞かざりし易學ト筮の道は所謂十哲（十哲が第一流の名士に限らず十哲の或者よりも賢なる大なる子羽や曾氏父子等も有りし也）後世の淺陋儒生論語の一節によりて僅に十人を知るは笑ふ可き也）に與へられずして當年の駿足にして後世俗眼見の思ひもかけざる魯人商瞿字は子木となん呼ばれし弟子に傳へられけるぞ面白き。

○さればこそ道理や孟軻は易を知らず知らねば之を説かざりしなれ、傳に曰く孟軻は業を子思或は子思の門人に受く子思之を曾子に受けたりと、曾參は實に孔門晩年の門

弟子にて夫子よりも齡少きこと四十餘歳（史記）なりといへば易を授かるに及ばざりしか猶又謂ふ所『參也魯』にして此人は大器晩成の人品にて二十三十の年配までお人好しの側にして彼の『回也不愚』と評せられし顔子には似而非なりしかも知るべからず曾子の材未必すしも易の才ならず曾子にして易に參契せざる以上は其の傳統を一意に後生大事と守護しける子思や孟軻が一言易に及ばざりしは怪しむに足らず寧ろ當然のこと也。孟子の書七篇、易を説かざるが故に其學祖孔子は易を學ばざりしとの推量は餘りに亂暴なり非論理なり沒意義ならざるか、六經に茶の事を見ず屈平が

離騷に梅を賦せず家持卿が萬葉集に牡丹の歌無し、是を以て直ちに當時の人が茶や梅や牡丹を知らざりしと武斷し能ふ耶能はざる耶。

○史を按ずるに孟子の時は道義常計を迂愚なりとし惟れ陰險奸譎、神怪禁忌の左道に馳せたる世なりければ之を矯正し救済するに日も足らざる孟子に在て、易占の如き動もすれば談理の空想に耽りやすく進止の膠柱に失ひやすかる道術を説くは寔に危険なりとの用心も之有りけん歟、試みに思へ、然らずんば辨を好むこと彼叟の如きにも似ず一辭是非を爲す所あらざるは何故ぞ。

（中篇了）

△易とは何ぞや——其定義——

○易は支那哲學の精微なるもの也、世界古今の哲學中に於て異彩を發つもの也、

『易ニ太極アリ是ニ兩儀ヲ生シ兩儀ハ四象ヲ生シ四象ハ八卦ヲ生ズ』 (聖辭傳)

是れ宇宙の分出を論ずるに太極兩儀四象八卦の大名目を立て、(宋儒が加一倍の法數) 萬物の進化發展を説けるなり又曰く、

『天地アリテ後ニ萬物アリ萬物アリテ後ニ男女アリ男女

アリテ後ニ夫婦アリ夫婦アリテ後ニ父子アリ父子アリテ後ニ君臣アリ君臣アリテ後ニ上下アリ上下アリテ後ニ禮義措ク所有リ』

萬物進化の上より終に人道に論及せるの筆路頗る自然なるに似たり、夫れ易は必ずしも所謂二元哲學ならざるも或意義にて爾云ふも妨げず易は二大勢力を以て説明の樞軸となす以爲へらく、凡そ自然界人間界には一陰一陽の二大勢力——二氣——陰陽——の流行するあり時と處との關係に應じて其れに順合して接り而して其の形象を變化するものなり、日月以て推移し、四時以て代謝し、榮瘁干滿以て之に

繼續し且つ人間界に在りても治亂興亡禍福得喪みな是二力の作用に於ける或る一定の『リズム』存在する者なるを思索すべし故に易を興し、者は天然界の諸現象を以て人間界の諸現象に交渉したるの極、天道に順應するものは人福得て守るべきを想ひ之を信仰し以て人力を盡して天命に待ち所謂警惕神に事へんと欲す。斯の思想是れ實に易の淵源にして尙又上下四千歳支那の倫理政教の根本義なるを知るべきなり。

○易の道たる廣大にして悉有、天道あり人道あり地道あり三才を説くに陰陽二者を以てす故に卦畫は六にして成

る、大は宇宙の運行小は蟲魚の死生に及び人こそ知らね其の生々滅々千變萬化みな或天則の定まれるものありと想ひ之を論ずるの語頗る整るを見たり。されば易の易たる所以は一方に於て日常茶飯眼前に横はるの消長盈虚の諸現象を捕へ以て宇宙本源の大探討を期待する他の方面に於ては夫の自然界が紛然錯如究竟を知らざるが如くにして而も秩序井然一絲亂れざる或準繩法規を以て運行變化するの理を執り移して則ち人世の明教を垂れんとするに在て存す、此易や實に何れの國いつの時何人の處を問はず皆以て人世福祉の増進に資り用ゐて支障抵牾を見ず往くとして可ならざる

無し、所謂之を古今に照らして悖らず之を華夷に施して適せざる無き者、彼の屑々として人種宗教の異、國體風習の別を論せんことは一笑にだも傾せざる所にして斯くて易そのものは渾然たる宇内統一の至教たるを得るに在り。

○易は詮する所『數』を演べて象を論ずるものなり故に易の書に於て數を説くこと甚だ詳かなるを見る、

(イ) 天一、地二、天三、地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十、

(ロ) 1 3 5 7 9 をば陽數——男性原理として積極的のものを御せしむ、

(ハ) 2 4 6 8 10 をば陰數——女性原理として消極的のものを組織せしむ、

是に於て此等諸數の結合法を萬有造化の大法に擬つる所あるに至ては大いに系統的に合理なるを知るべし、さるにても人智開けざる上世に夙くも數の觀念に基づきて夥多なる數を説出しける易經を講ず予は斯に希臘の聖ピタゴラスが數論を聯想せざる能はざるなり而して伏羲氏の當初猶甚だ單純なる數理思想なりしは無論のことにして想ふに易の觀念は古代希臘のヘシオドの其れと相若くらんやうに伏羲は只消長二勢力を認識し2 4 8の加一倍法を用ゐて八卦ま

でを構成したるに過ぎざるべし、爾來幾多聖賢の世々研鑽
討究を経て今日の易に進ましめたるを思ふ。

○終りに近づきて易之定義を一言し置かん、備らずと
雖も下の予が見を一瞥せば先づ不束ながらに定義を得られ
ん歎、

はと……………道易

自然界に於ける定時變換律を觀て其
の一定の公式を定め之に合同する人
類生活現象に論及し其を多く倫理的
に應用するもの也

○實を言へば易道も其の應用に在ては未だ全く盡され
たるにあらず否不完備不本意なるもの有るを免れず而も腐
儒は悟らずして死説を賣り奸巫は邪徑に立ちて怪語を叫ぶ
今の時今の予其れ誰れと相胥みてか道を進め業を成さんも
のぞ。

(終り)

明治征露第二年謙抑の講和成るの秋予東京に在り書を上野の丘に閱
す、幾も無うして血汐と火花の都に二三の人を叩いて益を求む、語
高き人にも惜しき點あり術秀でたる人にも惜しき點あり、茫然自失、
すなはち歸去來を謳うて故園に還れば、古稀の慈母莞然我を廣門に
迎へ斗酒を開いて洋洋として樂しむ、「流行之易在于此矣」を悟りぬ
河洛一家言を作り筆を擱いて喟嘆すれば思ひもかけざる天

外辭あり、

(佐久間象山の歌)

こゝろみに いざや叫ばん 山彦の

こたへだにせば こるは惜しまじ

活新式 吾が易占 第壹卷 大尾

大正七年四月廿日印刷
大正七年四月廿五日發行

正價金三拾錢

著作
所有
(吾が易占)

編輯者 高島天願
東京市日本橋區馬喰町四丁目一六
發行者 久保田長吉
東京市神田區元久右衛門町二ノ四
印刷者 岩見米三郎
東京市神田區元久右衛門町二ノ四
印刷所 清美堂

發行所

東京日本橋區馬喰町四ノ六
電話 浪花二二七八番
振替東京一七一九九番

獨立閣書店

278
1091

終

